

目次

◆ 基本的な考え方.....	1
1 研究の趣旨及び目的	
2 主題	
3 「言葉の力」とは	
4 「言葉の力」を中核に据えるには	
5 対応すべき主な課題	
◆ 実践研究	
1 「言葉の力」で生かす.....	7
2 「言葉の力」で深める.....	21
3 「言葉の力」で高める.....	35
◆ まとめ.....	53

基本的な考え方

1 研究の趣旨及び目的

言葉は、コミュニケーションの手段であるとともに、その言葉を母語とする人々の文化と深く結び付いています。私たちが思考をめぐらしたり感情を表現したりする際には、必ず言葉を用います。言葉は論理的な思考力や表現力、創造力、豊かな感性、知識や教養を備えるための基盤となっています。

こうした言葉の機能を踏まえ、現行の学習指導要領では、全ての教科等において、言語活動の充実を通して当該教科等に固有の思考力・判断力・表現力等を育成することが規定されています。一方、いじめや不登校、暴力



行為をはじめとする児童・生徒をめぐる諸問題の要因の一つに、円滑な人間関係を築くために必要な「言葉の力」が十分に育っていないことが挙げられます。体罰に象徴される教師の「言葉の力」への信頼の不足、学校経営方針として示された校長の「言葉」が組織全体に浸透せず、特色ある学校づくりが計画どおりに進まない、といった状況も散見されます。

そこで本委員会では、児童・生徒及び教師の「言葉の力」を高め、生かすことを重視した学校経営が喫緊の課題であると捉え、「言葉の力」を中核に据えた学校づくりについて実践研究を基に提言を行います。

2 主 題

「言葉の力」を中核とした学校づくり

3 「言葉の力」とは

「言葉の力」とは、「情報を正確に理解した上で、相手の表現の意図や背景を推論し、根拠を挙げて自分の意見を述べ、話し合っ

て課題を解決する力」のことです。この「言葉の力」を児童・生徒に着実に身に付けさせるとともに、教師自身が高め、教育活動の推進に当たって生かすことで、より充実した学校づくりが実現すると考えます。

研究を進めるに当たっては、「言葉の力」を、「考える力」、「感じる力」、「想像する力」、「表す力」の四つの観点から捉えました。これらは、言語を中心とした情報を「処理・操作する能力」であり、国語の能力の中核と考えられるものです。この四つの力が具体的な言語活動として現れたものが、「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」という行為です。

4 「言葉の力」を中核に捉えるには

(1) 言葉をめぐる認識の転換

「言葉の力」を中核に据えるに当たり、根本的な問題として注目すべきことがあります。それは、これまで日本人の多くが「言葉の力」を信じてこなかった、という指摘です。言葉への信頼については、コミュニケーションを通して形成される面が多いため、日本人の従来のコミュニケーションに関する特

性について捉えることが必要です。

日本人は、長い間、コミュニケーションに対する二つの態度や認識を有してきました。一つは、ことさら言葉に出さなくても相手に通じるはずだという態度です。もう一つは、「話せば分かる」という認識です。この言葉は、五・一五事件で、時の首相が語った言葉として有名です。そこには、多くの日本人がコミュニケーションに対して抱いてきた認識が含まれています。

こうした日本人のコミュニケーションに対する態度や認識は、日本にコミュニケーションに相当する和語が存在せず、長く「伝達」と訳されてきたことにも表れています。

価値観の多様化、情報化、国際化が進む現代の社会において、こうした態度や認識が通用しないことは明らかです。「小さな社会」である学校においても、一方的な「伝達」から双方向の「通じ合い」へと、言葉をめぐる認識を転換することが必要です。

(2) 言葉の果たす役割の重視

言葉はコミュニケーションの手段であるだけでなく、文化の中心でもあります。

私たちは、思考をめぐらしたり感情を表現したりする際に、必ず言葉を用います。様々な能力を身に付け、豊かな感性や幅広い知識、教養を備える上でも、言葉は極めて重要です。

言葉は、「知的活動」、「感性・情緒」、「コミュニケーション能力」の基盤であり、生涯を通じて自己形成に関わります。

ア 知的活動

私たちは、言葉によって、人類が蓄積してきた知識や知恵を獲得しています。知識なくして創造性や独自性を求めることは困難であるため、言葉は創造性などの根源を成していると言えます。

また、言葉は論理的思考力の基盤です。思考は言葉によって支えられており、深く思考するためには豊かな語彙が必要です。

イ 感性・情緒

私たちは、伝統的な詩歌等の文学作品を読むことなどにより、美しい日本語の表現やリズム、深い情感、自然への繊細な感受性などに触れ、美的感性や豊かな情緒を培っています。また、人間としてもつべき、勇気、誠実、礼節、愛、正義などは、情緒が形になって表れたものであり、これらも文学などの言葉を通して身に付けることができます。

ウ コミュニケーション能力

コミュニケーションの基本は、相手の人格や考え方を尊重する態度と言葉による伝え合いであり、言葉の運用能力がその根底を成しています。話し言葉や文字などによって、意思や感情などを伝え合い、コミュニケーションを成立させることは、言葉の最も基本的な役割です。

5 対応すべき主な課題

(1) 児童・生徒をめぐる諸問題への対応

いじめ、不登校、家庭内暴力、少年非行など、児童・生徒をめぐる問題が山積しています。それらの要因の一つとして、児童・生徒同士、児童・生徒と教師、児童・生徒と親、児童・生徒と大人などの間で、言葉を介した意思の疎通や、日常のコミュニケーションが十分に図れていないことが挙げられます。言葉による伝え合いの充実、喫緊の課題です。

学校においては、集団での活動や生活が基本となります。学級や学校での児童・生徒相互の人間関係の在り様は、言葉と密接な関わりがあります。相手や場に応じた言葉遣い、挨拶や感謝の言葉、互いを認め合い励まし合う言葉など、集団生活と人間関係の形成に不可欠な話し言葉の運用能力を、児童・生徒はもとより教師も高め、活用していくことが重要です。

近年の児童・生徒に関わる痛ましい事件については、人間としてもつべき感性・情緒を理解する力の欠如に起因するとの指摘があります。感性・情緒を理解するとは、他人の痛みを自分の痛みとして

感じる心、もののあわれ、家族愛、祖国愛、名誉や恥といった社会的・文化的な価値に関わる感性・情緒を自らのものとして受け止め、理解できる力のことです。

こうした力は、自然に身に付くものではなく、豊かな体験と言葉の教育を積み重ねることで、体得されるものであると考えます。児童・生徒の言葉の力を育成するねらいの一つは、こうした力を着実に育み、豊かな教養や大局観を培うことにあります。

児童・生徒の学力に関する各種の調査結果は、いずれも知識・技能の活用など、思考力・判断力・表現力等に課題があることを示しています。そのため、現行の学習指導要領では、児童・生徒の思考力・判断力・表現力等を着実に育むため、各教科の指導の中で、観察・実験やレポートの作成、論述といった各教科の知識・技能を活用する学習活動を充実させることを重視しています。これらの学習活動の基盤が「言葉の力」であることは、言うまでもありません。

(2) 学校や教師をめぐる諸問題への対応

「不言実行」という熟語が示すとおり、古来、日本人の多くが言葉より行動を重視してきたのではないかと、いう指摘があります。言葉によって物事が変わる、変えていくことができるよう、言葉への信頼を、学校づくりの根幹に据える必要があります。

現在、学校には開かれた学校づくりを推進することや、組織的な運営により、学校の自主性・自立性を高めることが求められています。そのためには、教育方針等を分かりやすく発信すること、保護者や地域住民の要望等を把握して対応すること、関係機関等と日頃から積極的に協力・折衝すること、そして何より、学校や地域の実態を把握し、課題解決に向けた経営目標を設定して、その内容を所属職員に理解させ、力を結集して目標に基づく組織的な教育活動を実施することが重要です。これら全ての基盤となるのが、「言葉の力」です。

今日、社会問題となっている体罰の対極にあるもの、それは児童・生徒との信頼関係に基づく言葉による指導です。児童・生徒の課題のある行動の背景を理解し、一人一人に応じた言葉による丁寧な指導が求められています。

一方、学校では、大量退職、大量採用に伴い、若手の教師が急速に増加しています。これまで学校を支えてきた経験豊かな教師の実践的知識や指導技術を次世代に引き継ぐことが、大きな課題となっています。若手の教師には、上司や同僚とコミュニケーションをとりながら円滑に校務を遂行すること、組織の一員として校務に主体的に参画すること、校務の問題点を把握して改善することなどが求められています。これらのことを実現するためにも、学校の中に言葉への信頼を育てることが必須です。

言葉への信頼は、主に人と人とのコミュニケーションを通じて育成されます。まずは、教師間のコミュニケーションをより活性化させ、必要に応じて改善することで、互いの信頼関係を高めていくことが重要です。

(3) 社会の変化への対応

価値観の多様化、都市化、少子高齢化、国際化、情報化など、社会の変化が急速に進んでいます。それらの変化に対応するため、「言葉の力」は重要な役割を果たします。

多様な考え方や価値観をもった人々との間で伝え合い、相互理解を深めながら人間関係を形成していくためには、従来に増して言葉の運用能力が重要になります。また、都市化や少子高齢化などが同時に進展する中で、家庭や地域の教育力の低下や人間関係の希薄化が進行しつつあります。異なる世代間における円滑な意思疎通は、今後ますます困難になってくることが予測されます。言葉の運用能力に加え、高齢者と若者との間で、一定の言葉の知識を共有しておくことも大切です。

国際化が進展する中、私たちは、母語としての国語への愛情と日本文化についての理解をもち、日本人としての自覚や意識を確立することが必要です。その上で、各国固有の文化についての理解とそれを尊重する態度が一層大切になります。こうした意識や理解をもつために、言葉は極めて重要な役割を担っています。また、異文化との接触が増大し、これまで以上に言葉の運用能力が求められます。

一方、情報化の進展により、多くの人々が膨大な情報に日々接しています。これらの情報に埋没せず、適切に活用する能力、具体的には、膨大な情報を速やかに処理・操作する能力、必要な情報と不要な情報を選択する能力、多くの情報から本質をつかみ取る能力、限られた時間内での確に文章にまとめ、自ら情報を発信する能力などが、これまで以上に求められます。



なお、「言葉の力」を学校づくりの中核に据えるに当たっては、「言葉の限界」を教師が共通に理解することが重要です。その上で、限界を補う方策を立て実践する必要があります。

私たちは、言葉によって事実を完全に表現することはできません。例えば、人の表情や感情、室内の状況等を説明する際、それら全てを言い表すことは不可能です。

日頃、私たちは事実を自らの判断で取捨選択し、言葉で表現しています。取捨選択の仕方は人によって異なります。言葉を介してイメージされる事実も人それぞれです。よって、言葉で情報を伝え合う場合には、情報の送り手と受け手とが、歩み寄る姿勢をもつことが必要です。

二人一組で行う「絵描きゲーム」は、私たちに言葉の限界と、それを補う方策について気付かせてくれます。二人のうちの一人は、手元の図形を見ながら、相手にその描き方を言葉で説明します。説明の受け手は、説明者が持っている図形を見たり、自分が描く図形を見せたりすることはできません。図形が複雑なほど、説明者が持つ図形と、受け手が描く図形にはズレが生じます。

このズレを少なくするためには、情報の送り手と受け手とが、より正確に情報を伝え合う、という目標に向かって共に心と力を合わせることで、すなわち「協同」することが必要です。一方的な発信・受信ではなく、互いに確認し合いながら目標達成に向かう言葉による伝え合いが欠かせません。

学校づくりにおいても、教職員が互いに目標達成に向けて意思を統一し、コミュニケーションを活性化することが必要です。言葉の不完全さを補うのは「協同」であり、「協同」を支えるのが「言葉」であることを、常に認識しながら、学校運営に当たることが重要です。

6 学校づくりの主な視点

現在、学校には多種多様な教育課題があります。どの課題も、教師一人の力では解決することは困難であり、学校の組織や人材、地域の教育資源を生かして取り組むことが必要です。

一方、体罰をはじめ児童・生徒の人権を侵害する教師の言動等により、児童・生徒との関係を築けなかったり、日頃の人間的なふれあいが十分でなく、心のサインをつかめなかったりすることがあります。保護者等からの期待に応えるためにも、教師は「言葉の力」を生かして児童・生徒や保護者との信頼関係を深め、地域との連携を強めていくことが重要です。

各教科等の指導では、言語活動の充実による学力向上、望ましい人間関係の形成、豊かな心の育成が求められており、これらの実現には、教師と児童・生徒の「言葉の力」を高めることが必要です。

そこで本研究では、キーワードを「生かす」、「深める」、「高める」と設定しました。「生かす」とは、価値あるものにすること、「深める」とは、関係をより確かなものにすること、「高める」とは、可能性を広げることです。「言葉の力」で＜組織＞を生かす、＜人材＞を生かす、＜地域の教育資源＞を生かす、＜児童・生徒との信頼関係＞を深める、＜保護者との信頼関係＞を深める、＜地域との連携＞を深める、＜児童・生徒の学力＞を高める、＜人間関係形成能力＞を高める、＜感性・情緒＞を高める、＜教師の力＞を高めるという10の視点から実践研究を行い、その結果を基に「言葉の力」を中核とした学校づくりのポイントを明らかにすることにしました。

「言葉の力」を中核

「言葉の力」とは、「情報を正確に理解した上で、相手の表現の意図や背景を推論し、根拠を挙げて自分の意見を述べ、話し合って課題を解決する力」のことです。

こうした力については、児童・生徒に身に付けさせるだけではなく、教師自身が自らの力を全教育活動の推進に当たって生かし高めることで、充実した学校づくりが実現します。

課題 学校経営方針が組織の全体に浸透せず、学校が抱える多様な課題を、組織を挙げて迅速に解決することが十分にできない。 課題解決に向けた経営目標を設定し、その内容を教師一人一人に理解させ、力を結集して目標に基づく組織的な教育活動を推進する。 事例1 学校経営計画の着実な実施 9・10ページ 事例2 経営改善に資する学校評価 11・12ページ	組織 人材 地域の教育資源 生かす
課題 経験の浅い教師による組織の重要な役割遂行及び主幹教諭・管理職候補者等の発掘・育成が十分に行われていない。 個々の教師の能力・適性を考慮しつつ、育成の視点から職層に応じた意図的・計画的な人材活用を行う。 事例3 名言を生かした人材育成 13・14ページ 事例4 「ユニット研修」による人材育成 15・16ページ	
課題 地域の教育資源に関する教師の知識・理解が十分ではなく、学校の教育活動に生かし切れていない。 地域の自然や伝統・文化、人材、施設や機関等の教育資源について、全教員が理解を深め、学校の教育活動に積極的に活用する。 事例5 地域の教育資源を有効活用するシステムの構築 17・18ページ 事例6 郷土の伝統・文化の教材化 19・20ページ	

情報を正確に理解した上で、相手の表現の意図や背景を推論し、

考える力

感じる力

高

児童・生徒の生きる力

学 力	人間関係形成能力
課題 各種調査の結果から、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題がある。 国語科のみならず、各教科等に固有の言語能力を育成するため、それぞれの教科等の知識・技能を活用する言語活動の質をより一層向上させる。 事例13 クリティカル・シンキングを取り入れた授業づくり(小学校) 37・38ページ 事例14 クリティカル・シンキングを取り入れた授業づくり(中学校) 39・40ページ (平成24年度東京都多摩地区教育推進委員会報告書参照)	課題 自分に自信がもてず、友達や仲間のことで悩むなど、人間関係の形成が困難な児童・生徒が増加している。 言葉によるコミュニケーション教育の全体計画を基に、学校の教育活動全体を通じて、児童・生徒のコミュニケーション能力を育成する。 事例15 コミュニケーション能力の基礎を育む 41・42ページ 事例16 異なる意見をもつ者同士の対話 43・44ページ (平成23年度東京都多摩地区教育推進委員会報告書参照)

とした学校づくり

本研究では、「言葉の力」を、「考える力」、「感じる力」、「想像する力」、「表す力」の四つの観点から捉え、「言葉の力」で〈生かす〉、〈深める〉、〈高める〉をキーワードとして、多摩地区の公立小・中学校が抱える主な課題とその解決のための方策について追究しました。それぞれの方策については、相互に関連しながら学校づくりに資することになります。

深める	児童・生徒との信頼関係	課題 人権を侵害する教師の言動等により、児童・生徒との関係を築けなかったり、日頃の人間的な触れ合いが十分でなく、心のサインをつかめなかったりすることがある。 児童・生徒のよい点や進歩の状況などに着目してほめ励ますとともに、話を傾聴し、考えを引き出す。 事例7 挨拶プラス一言運動 23・24ページ 事例8 いつでも誰にでも相談週間 25・26ページ
	保護者との信頼関係	課題 家庭の要望や意見等を把握して教育活動に生かすことや、相互の意思疎通を図ることが十分でなく、保護者からの信頼を得られないことがある。 問題行動への対処だけでなく、個々の児童・生徒の自尊感情の育成や規範意識の醸成、学力向上などの視点をもって計画的に連携を進める。 事例9 「行きたい」、「来てよかった」、「行って得した」保護者会 27・28ページ 事例10 保護者との協同による体験型講座 29・30ページ
	地域との連携	課題 学校からの一方的な連携に終始し、双方にメリットのある連携を築けない。 また、地域の要望や意見等を的確に把握できず、期待に応えることができない。 家庭・学校・地域のそれぞれの役割を明確にし、連携・交流の在り方や地域の活性化につながる教育活動について共に考え、実践する。 事例11 学校評議員との一層の連携 31・32ページ 事例12 郷土の伝統・文化に学ぶ道徳授業地区公開講座 33・34ページ

根拠を挙げて自分の意見を述べ、話し合っ課題を解決する力

想像する力

表す力

め る

感性・情緒		教師の力	
課題 心を揺り動かされる事物に出会った際、ただ直感的に捉え、例えば「わあー、すごい」という感情表現しかできない。 語彙を豊かにするとともに、例えば、「何が」「どのように」「すばらしいのかについて、具体的な表現を用いて伝え合えるよう、表現力を高める。 事例17 全校で取り組む俳句の創作活動 45・46ページ 事例18 小学校低学年における書評会 47・48ページ		課題 各種調査の結果から、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題がある。 二つの力の基盤となる「言葉の力」を、研修や日々の職務を通してより一層高めていく。また、読書を通じて、教育活動全体の基盤となる「教養・価値観・感性等」を身に付ける。 事例19 校務改善の企画・提案 49・50ページ 事例20 保護者への対応力を高める 51・52ページ	



実践研究

①「言葉の力」で生かす

(1) 組織

アメリカの経営学者バーナードによれば、組織活性化の基盤は、協働体制の確立にあります。体制づくりに必要なのは、「目標への意思統合」と「コミュニケーションの活性化」であり、その結果として協働体制が生まれます。

ア 課題

多摩地区の管理職研修会でおよそ100校の学校経営方針を分析したところ、その多くが理念にとどまり、具体的な目標になっていませんでした。また、単年度の計画は示されているものの、中・長期的なビジョンに基づく年度ごとの目標が立てられているものは1割を切っていました。

一方、副校長の多くは、経営計画の具現化に向けた方策を立て、教職員に示すに至っていません。

こうした状況では、学校経営方針が組織の全体にまで浸透せず、校長が描く特色ある学校づくりに向けた具体的な教育活動を組織的・計画的に実施することは困難です。

イ 解決の方向性

管理職からの明確な目標の提示、指導・助言を受け、主幹教諭及び主任教諭が、経営目標の達成に向けた分掌組織内での事務分担、指導・助言、進行管理を行うことが必要です。

コミュニケーションの活性化については、全ての教師が共通認識をもてるよう諸会議を充実させることが大切です。職員会議、学年会、教科部会、保護者会、地域懇談会などの有効性と効率性を高めることです。

学校では、校務分掌間の連携・協力が不足しがちです。従来の校務分掌の枠組を超えて、取り組むべき諸課題に対して迅速に対応できるよう企画調整会議等を工夫・改善し、機動的な組織づくりを行うことが重要です。

ウ 実践事例

事例1 学校経営計画の着実な実施 — 目標への意思統合及びコミュニケーションの活性化 —

事例2 経営改善に資する学校評価 — 学校経営計画との連動 —



(2) 人材

校長・副校長及びミドルリーダーが、人事考課制度やOJT等の機会を活用し、個々の教師に適切な指導・助言を行うことで、資質・能力やモラルが向上し、学校組織が活性化します。また、学校の教育計画を地域に説明して外部人材を募り、その専門性を生かすことで、一層充実した指導が実現します。

ア 課題

大量退職、大量採用の時代を迎え、経験の浅い教師に組織の重要な役割を担わせることが必要になっています。これまで学校を支えてきた経験豊かな教師を生かし、実践的知識や指導技術を次代に引き

継がせることが大切です。

一方、学校の教育力を一層高め、諸課題の解決を図るためには、従前に増して開かれた学校づくりを進め、外部人材を積極的に活用することが必要です。しかしながら、外部人材の活用状況については、学校によって格差があるのが現状です。

イ 解決の方向性

経験の浅い教師を組織のリーダーとして生かすには、その適性や能力に応じて適材適所の配置を行い、スモールステップで課題を与え、日頃から対話を通して課題解決を図ることで達成感を得させ、組織目標の達成に向けて自らのよさを発揮させることが重要です。また、経験豊かな少数の教師がもつ実践的知識や指導技術を生かすには、他の教師の抱える課題や悩みに気づき、その解決に向けた具体的な助言の機会を日常的に設けることが必要です。

一方、外部人材の活用を図るには、全ての教師が地域の人々と共に児童・生徒を育てていくという視点に立ち、いわゆる「学校の敷居」を下げることで、学校の教育方針や特色ある教育活動、協力を要する具体的な教育活動について地域に向けて分かりやすく説明すること、外部人材と連携・協力するための校内の窓口を設置すること、人材ネットワークの構築と活用等が必要になります。

ウ 実践事例

事例3 名言を生かした人材育成 — 各界のリーダーやトップアスリートに学ぶ —

事例4 「ユニット研修」による人材育成 — 15分の積み重ねによる能力向上 —

(3) 地域教育資源

ここで言う「教育資源」とは、学校にとって教育的価値のある「ひと、もの、こと」を指します。

地域の自然や人材、施設や関係諸機関など、様々な資源がある中、特に重視したいのが、地域に根付く伝統・文化です。

ア 課題

地域の教育資源、とりわけ伝統・文化に関する教師の知識・理解が十分ではなく、学校の教育活動に生かし切れていない状況が見られます。また、体験的な活動を取り入れていても、学習者である児童・生徒が、地域の伝統・文化の価値について自分なりに考え、表現するに至っていない場合が多く見受けられます。

イ 解決の方向性

多摩地区には、それぞれの地域に根付いた伝統・文化が数多くあります。児童・生徒にとって公立小・中学校への在籍期間中は、身近な地域の伝統・文化を体験的に学ぶよい機会です。

児童・生徒に地域の伝統・文化を理解し大切にすることを育むためには、何より教師自身が、地域の伝統・文化に興味・関心をもち、その価値を理解することが大切です。そのため、地域の専門家を講師に招いた研修や、教材の開発及び人材の発掘等を、近隣の学校同士が協力して行うことが有効です。

なお、イベント型の単発の学習では、児童・生徒の学びを定着・発展させることは困難です。各教科等の年間指導計画に位置付け、日々の授業で計画的に指導することが必要です。その際、児童・生徒が学習の対象となる伝統・文化の意味や意義について考え、実生活でどう生かしていくかを判断し、自分の言葉で表現し合う学習過程を重視することが大切です。

ウ 実践事例

事例5 地域の教育資源を有効活用するシステムの構築 — 全教師が関わる職場体験学習 —

事例6 郷土の伝統・文化の教材化 — 伝統芸能の保存会との協同 —

学校経営計画の着実な実施

事例 1

－ 目標への意思統合及びコミュニケーションの活性化 －

「言葉の力」で

組織を

生かす

ねらい

学校経営計画の着実な実施に向けて、各教師の意思を統合するとともに、コミュニケーションの活性化を図る。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	＜学校経営計画の理解＞ ○ 全教師が学校経営計画を読み込む。	【考える】◆ 中期的課題を踏まえ、今年度の重点を理解する。 【感じる】◆ 学校経営計画に込められた校長の思いを感受する。
2	＜「重点項目整理表」「課題別カード」の作成＞ ○ 副校長は、学校経営計画に基づき、「重点項目整理表」を作成する。 ○ 主幹教諭及び主任教諭は、分掌内の具体的教育活動の策定に係る指導・助言を行う。 ○ 教諭は、主幹教諭及び主任教諭の指導・助言を受けながら「課題別カード」を作成する。	【考える】◆ 具体的教育活動の実施計画を考案する。 【感じる】◆ 「課題別カード」から、作成者の思いを感受する。 【想像する】◆ 児童・生徒や教師の変容を予想しながら、具体の取組を策定する。 【表す】◆ より簡潔に分かりやすく「重点項目整理表」及び「課題別カード」を作成する。
3	＜目標達成に向けた課題の共有と解決策の実施＞ ○ 副校長は、主幹教諭及び主任教諭から各教育活動の進捗状況について随時報告させ、必要に応じて指導・助言を行う。 ○ 主幹教諭及び主任教諭は、実施計画の取組過程で、担当教諭に対して目標達成に向けた課題と解決策の策定・実施について指導・助言を行う。 ○ 担当教諭は、目標達成に向けた課題の解決策について、主幹教諭及び主任教諭の指導・助言を受けて策定し、実施する。	【考える】◆ 目標達成に向けた課題と解決策について考案する。 【想像する】◆ 解決策を実施することで、取組が目標達成に向かう過程を思い描く。 【表す】◆ 根拠となる事実を挙げながら、互いの考えを伝え合う。

※ 「重点項目整理表」及び「課題別カード」は、多摩教育事務所ホームページに掲載中です。URL <http://www.tamajimu.metro.tokyo.jp/>

組織的な対応に向けて

校 長	副校長	分掌のリーダー (主幹教諭等)	教 諭
○ 学校経営計画の策定・説明 ○ 中期的課題（3～5年）を踏まえた単年度の目標提示 ○ 「重点項目整理表」の作成指示及び指導	○ 「重点項目整理表」の作成 ○ 「重点項目整理表」に基づく「課題別カード」の作成・実施に係る分掌のリーダーへの指導	○ 課題解決のための具体策及び達成目標設定に係る指導・助言 ○ 「課題別カード」を用いた分掌経営 ○ 「課題別カード」を用いた取組を適宜副校長に報告	○ 「課題別カード」の作成 ○ 「課題別カード」を用いた取組の実施及び評価・改善

具体の活動場面 【取組 3】

取組 3 目標達成に向けた課題の共有と解決策の実施

副校長による「重点項目整理表」

項目名	経営計画との関連	分掌名	達成目標（評価規準）
健全育成	健やかな心と体の育成	生活指導部	挨拶の実施率、90%以上

＜これまでの取組＞

- ・ 4月、副校長が校長の学校経営計画を受けて「重点項目整理表」を作成
- ・ 主幹教諭の指導の下、各分掌の担当者が「課題別カード」を作成

- 各分掌の担当教諭は、取組を推進する過程で、随時「課題別カード」に実際の取組状況や児童の変容を赤で加筆していった。



「課題別カード」

項目名	健全育成
分掌名	生活指導部
担当者名	〇〇 〇〇
達成目標	挨拶実施率 90%以上
達成に向けた課題及び方策	学期に1回、挨拶運動を特別活動部と連携して行う。 月初めの全校朝会における講話の実施

月	計画
4	年度初めの朝会で、挨拶の効用に関する講話の実施
5	挨拶運動の実施及び取組の評価 ◎ 学年を越えて挨拶するようになった。◎ 教員に対して会釈できるようになった。 ▲ 子供のアイデアを生かした取組にしたい。
11	挨拶運動2回目「挨拶川柳」 ◎ 児童会でアイデアを募集。「挨拶川柳」に決定
12	

評価及び次年度への引継ぎ

- 2か月に1回、加筆した「課題別カード」を基に、主幹教諭が担当者との面談を通して、指導・助言を行った。
- 主幹教諭と担当教諭との対話を通して、目標の達成度及び成果と課題の把握、次年度に向けた引継ぎ事項等を明確にしていた。



◆ 取組の成果



「組織の一員として、自分が学校を動かしている、という実感がもてます。」

「目標達成につなげるためのアイデアを積極的に提案しています。」



- 若手教師を中心に、自らが学校づくりに主体的に関わっているという自覚や、自分のアイデアを積極的に提案しようとする意識の高まりが見られた。
- 学級経営案に「課題別カード」の内容を反映させることで、学校経営計画の実現が日常的に意識されるようになった。

考 察

学校経営計画を着実に実施し、校長が描く目指す学校像を実現するためには、管理職のリーダーシップの下、所属職員の協働体制を確立することが重要である。体制づくりに必要なのは、目標への意思の統合とコミュニケーションの活性化であり、学校が組織としての目標を堅持し、その達成に向けて教師が共通実践を積むことで、学校改善が実現する。

「重点項目整理表」と「課題別カード」は、そのためのツールとしての機能を果たした。両資料を作成・活用する過程で、教職員の意識は学校経営計画の実現に向けて集約されていった。また、管理職相互、管理職とミドルリーダー、ミドルリーダーと教諭との双方向のコミュニケーションが活発になり、若手をはじめ多くの教師の学校経営への参画意識を高めることにもつながった。

なお、両資料の作成に当たっては、副校長研修会や主幹教諭研修会、主任教諭研修会、15分を1単位時間とするミニ研修会を活用したことで、教師の負担感を軽減することにつながったと考える。多摩教育事務所のホームページに様式を掲載中なので、各学校の実態に即して活用されたい。

経営改善に資する学校評価

事例 2

— 学校経営計画との連動 —

「言葉の力」で

組織を

生かす

ねらい

学校経営計画に即した自己評価及び対話を重視した学校関係者評価を実施することで、着実な経営改善に資する。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	＜評価指標の作成＞ ○ 「課題別カード」を基に評価指標を作成する。	【考える】 ◆ 副校長と分掌のリーダー、分掌のリーダーと担当教諭とがそれぞれ協議を行い、評価指標を作成する。
2	＜自己評価 実施及び分析＞ ○ 取組の実施直後に、課題及び成果を明らかにし、「課題別カード」に記入する。 ○ 「重点項目整理表」の各項目について、「課題別カード」の記述を基に、自己評価を行う。 ○ 評価の低い項目、児童・生徒や保護者対象のアンケート結果と自己評価との間に「ずれ」がある項目について、その理由を分析し、改善策を考える。 ○ 学校関係者評価委員会で説明する内容を精選する。	【考える】 ◆ 学校評価に係る児童、保護者、教員の中間評価を基に、各取組の成果と課題を捉える。 【想像する】 ◆ 学校関係者評価委員（以下「評価委員という。」）の学校に対する期待や要望を想定する。
3	＜外部評価 学校関係者評価委員会における説明＞ ○ 学校関係者評価委員会において、中間評価の結果に係る事項を説明する。 ○ 評価委員との対話から、より具体の意見を引き出す。	【表す】 ◆ 各取組の成果と課題を分かりやすく挙げながら、評価委員に説明する。 【感じる】 ◆ 評価委員からの指摘を、「批判」ではなく「学校への期待」として捉える。

組織的な対応に向けて

校 長	副校長	分掌のリーダー (主幹教諭等)	教 諭
○ 中期的課題及び単年度計画の策定（学校経営計画） ○ 評価項目及び評価指標の作成指示及び指導	○ 評価項目及び評価指標の策定に係る指導 ○ 自己評価の実施に係る指導 ○ 評価の集計結果に基づく課題の明確化、改善策の検討の指示及び指導	○ 評価項目及び評価指標の作成に係る指導 ○ 課題の明確化及び改善策の検討 ○ 評価委員への説明及び協議	○ 評価項目及び評価指標の作成 ○ 自己評価の実施

具体の活動場面 【取組 1、3】

取組 1 評価指標の作成

- 学校経営計画を基に作成した「重点項目整理表」を基に、「学校評価シート」の評価指標を作成する。

副校長による「重点項目整理表」			
項目名	経営計画との関連	分掌名	達成目標(評価規準)
家庭学習の習慣化	各学級における方法や内容の具体的な提示	教務	80%の生徒が家庭学習ノートを毎日提出

学校評価シート	学校経営計画・重点項目			自己評価			
	学 力 向 上	中期経営目標	短期経営目標	具体的方策	評価項目	評価指標	
		○ 教師の授業力を向上し、確かな学力を身に付けさせる	○ 思考力・判断力・表現力を高めるために、指導法の改善を図る。	○ 「考えて表現する活動」を全教科において取り入れる。	○ 週ごとの指導計画に明記し、毎時間実践する。	4	○ 全教員が実施した。 ○ 年3回の教科別学習研修会の実施率80%以上
						3	○ 90%の教員が実施した。 ○ 年3回の教科別学習研修会の実施率70%以上
						2	○ 80%の教員が実施した。 ○ 年3回の教科別学習研修会の実施率60%以上
						1	○ 実施した教員が80%未満だった。 ○ 年3回の教科別学習研修会の実施率60%未満
		○ 家庭学習の習慣と、効果的な方法を身に付けさせる。	○ 各学級において家庭学習の方法と内容を具体的に示す。	○ 家庭学習ノートを毎日提出させる。	4	○ 全学級で実施した。 ○ 80%以上の生徒が毎日家庭学習ノートを提出した。	
					3	○ 90%以上の学級が実施した。 ○ 70%以上の生徒が毎日家庭学習ノートを提出した。	
					2	○ 80%以上の学級が実施した。 ○ 60%以上の生徒が毎日家庭学習ノートを提出した。	
					1	○ 実施した学級が80%未満だった。 ○ 毎日家庭学習ノートを提出した生徒が60%未満	

取組 3 外部評価、学校関係者評価委員会における説明

- 分掌のリーダーが、「課題別カード」を基に、評価委員に対して、取組内容、成果及び課題について説明し、考案中の課題解決の方策について述べた。
- 取組内容、成果及び課題について、具体例を示して説明し、課題解決策を提案した。
- 評価委員からは、それぞれの立場から忌憚のない意見が発表された。

「課題別カード」			
項目名	家庭学習の充実		
分掌名	教 務	担当者名	〇〇 〇〇
達成目標	家庭学習ノートを毎日提出させる。		
達成に向けた課題及び方策	各学級において家庭学習の方法と内容を具体的に示す。		
月	計 画		
4	・ 家庭学習のガイダンスを全学級で実施する。		
評価及び次年度への引き継ぎ			
○ 家庭学習の習慣化を図るために、「手引き」等を作成し、全生徒に配布する。			



家庭学習の習慣化を図るために、「家庭学習の手引き」を作成します。次のような内容を考えています。

- ・ 家庭学習の内容例
- ・ テストに向けたスケジュール
- ・ 教科ごとの学習方法

(分掌のリーダー)

手引きを配るだけでなく、その活用方法等について保護者会で説明してほしいと思います。(保護者)

学習塾でも同様のものを出しています。ぜひ、それを上回る実効性の高いものを期待します。(地域住民)

◆ 取組の成果

- 学校経営計画と連動した評価指標により、各担当教諭が「学校づくり」を意識しながら取組を推進した。
- 評価委員に対する説明については、「取組」「成果と課題」「解決策」という構成で行った。解決策について各委員から多面的な意見が出たため、教師たちは改めて評価委員の学校に対する関心の高さを実感し、開かれた学校づくりの重要性を再認識した。

考 察

学校評価の主なねらいは、学校の重点項目の達成状況や達成に向けた取組の適切さを評価することで、児童がより良い学校生活を送れるよう、組織的・継続的に学校運営を改善することである。また、コミュニケーションツールとして活用することで、保護者や地域住民の理解と参画を得ながら、学校づくりを進めていくことも重要である。しかしながら、自己評価が経営改善に必ずしも結び付いていない、学校関係者に学校の実情が十分に伝わっていないまま、評価を委ねてしまっている、といったことが、多摩地区の小・中学校に散見される。

そこで本事例では、まず、学校経営計画の重点項目と学校評価の評価項目を連動させた。さらに、評価委員が評価を行う前に、授業や学校行事の参観、教職員との意見交換を行い、学校の実情について理解を深めるようにした。

各学校が、本事例を実践するに当たっては、「事例1」の「重点項目整理表」及び「課題別カード」を活用した取組との関連を図ることが必要であると考えられる。

名言を生かした人材育成

事例 3

－ 各界のリーダーやトップアスリートに学ぶ －

「言葉の力」で

人材を

生かす

ねらい

名言を発想の源として人材育成に係る課題や今後の方向性を明らかにし、交流を通して考えを深め合う。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	＜受信・分析＞ ○ 「教育経営に生きる現代名語録※」（以下、「名語録」という。）を読み、人材育成の観点から印象に残る名言をチェックする。 ○ チェックした名言のうち、人材育成のヒントとなるものを選び出す。	【感じる】 ◆ 名言に込められた思いや人間性を感じ取る。 【考える】 ◆ 名言を基に、自校の人材育成の課題を捉える。
2	＜個人の考えのまとめ＞ ○ 演習シートに、選んだ名言の番号、人材育成に係る現状及び今後の方向性について、そのキーワードのみを簡潔に記す。	【考える】 ◆ 名言から、課題の解決策について考案する。
3	＜交流、振り返り＞ ○ 職層ごとの対話形式で、人材育成に関する具体的な方策について話し合い、自己の考えを加筆・修正する。 ○ 話し合ったことを基に、演習シートに加筆・修正を加える。	【表す力】 ◆ 名言を基に考え、感じ、想像したことを、自分の言葉で述べる。 【想像する】 ◆ 相手の置かれている状況を思い描く。 ◆ 相手の表情や態度から、言外の思いを察する。 【感じる】 ◆ 相手の人材育成にかける思いを感受する。

※ 「教育経営に生きる現代名語録」は、多摩教育事務所ホームページに掲載中です。URL <http://www.tamajimu.metro.tokyo.jp/>

組織的な対応に向けて

校 長	副校長	分掌のリーダー (主幹教諭等)	教 諭
○ 人材育成の方針を明示(学校経営計画) ○ 演習シートを基にした、各教師の人材育成に係る課題意識の掌握 ○ 自己申告の面接等を通じた、人材育成に係る成果と課題の把握及び指導	○ 研修の企画・運営に係る研究主任への指導・助言 ○ 演習に基づく人材育成に係る方策に対する支援	○ 研修の企画・運営 ○ 研修テーマに沿った名言の選別 ○ 研修の評価 ○ 人材育成に係る方策の実施	○ 研修の実施 ○ 自己申告の面接時に、人材育成策の進捗状況を報告 ○ 研修の評価 ○ 人材育成に係る方策の実施

具体の活動場面 【取組 2、3】

取組 2 個人の考えのまとめ

- 育成対象とする教師をイメージして「名語録」を読み、名言を選んだ。
- 人材育成に係る現状と今後の方向性について、キーワードを演習シートに記入した。

取組 3 交流、振り返り

- 対話形式で交流を行った。
- 人材育成に関する課題及び解決策を、職層ごとのグループで話し合った。

危機への対応の仕方、個人及び組織の真価が問われると捉え、困難から逃げずに挑むよう支援しています。32 番の名言は、これからは折に触れて引用したいと思います。



せっかく会議を開いても、物事を決めずに終わったり、決めたことを実行しないままにしたりすることがあります。だから、私は 17 番の名言を選びました。

- 自己の考えを加筆、修正した。

○ 組織が機動的であるためには、全員が同じ方向に向いていなければならない。そのためには、「決めたことは必ずやる」という強い心構えが必要だと感じた。

○ Bさんの、「逃げずに挑む」という言葉が心に残った。若手の教師に育てたい視点の一つだ。

◆ 取組の成果

- 職層、直面している人材育成上の課題に応じて、選ぶ名言も様々であった。選んだ「名言」を紹介し合い、感じ取ったことを交流することで、互いの置かれている立場に共感し、人材育成の方策を共に考案する姿が見られた。
- 各界のリーダーやトップアスリートの名言に触発され、新たな視点で人材育成について考えることができたという声が複数聞かれた。

考 察

一つの言葉との巡り合いが、私たちの前途に光明をもたらすことがある。言葉に触発され、言葉にヒントを得て、課題解決に向かう意欲が高まり、具体の方策が思いつくこともある。

本事例では、現代に生きる著名人の名言からヒントを得て、実際の人材育成の方策について考察を深める研修について提案した。

研修テキストには、「教育経営に生きる現代名語録」（多摩教育事務所作成）を用いた。そこには、企業経営者やプロスポーツ選手等、学校関係者以外の残した名言が収録されている。人材育成を研修テーマとすれば、管理職研修、教務・生活指導等の主任研修で、また自己啓発がテーマであれば、校内研修はもとより、初任者研修等でも活用できる。

研修を進めるに当たっては、テキストを読んでワークシートに記入するのはキーワードのみとすること、交流活動は職層や立場を踏まえた対話形式とし、複数の相手と交流する機会を設定することが大切である。

なお、研修時間が十分に確保できない場合には、あらかじめ管理職等がいくつかの名言を抜粋して研修資料とするとよい。

「ユニット研修」による人材育成

事例 4

— 15 分の積み重ねによる能力向上 —

「言葉の力」で

人材を

生かす

ねらい

15 分間の「ユニット研修」を継続して実施することにより、研修テーマに関する思考を深める。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	＜自己の考えの形成＞ 15分 ○ 研修テーマ「生徒の心のサインをつかむための具体的な方策」について考える。	【考える】 ◆ 研修テーマについて、自分の考えをメモ書きする。 ◆ 研修内容を、今後の職務にどのように生かしていくか、想定しながら取り組む。
		【考える】 ◆ 自己の考えをまとめる。
2	＜各自の考えの発表＞ 15分 ○ 3人一組のグループ内で、各自の考えを発表する。	【表 す】 ◆ 自分の考えを端的に述べる。 【感じる】 ◆ 他の教師の思いを感受する。 【想像する】 ◆ 具体の場面を思い描きながら発表を聞く。
		【考える】 ◆ 他の教師の発表について、質問したいことを考える。
3・4	＜考えの交流（話し合い）＞ 各15分 ○ 前回の発表を踏まえて話し合う。	【表 す】 ◆ 互いの考えを引き出しながら話し合う。 【想像する】 ◆ 相手の表情や態度から言外の思いを察する。
		【考える】 ◆ 交流を踏まえ、自己の考えを見直す。
5	＜自己の考えの再構築＞ 15分 ○ 話し合った内容を踏まえて、自分の考えを再構築する。	【考える】 ◆ 多様な意見を基に、自己の考えを加筆・修正する。

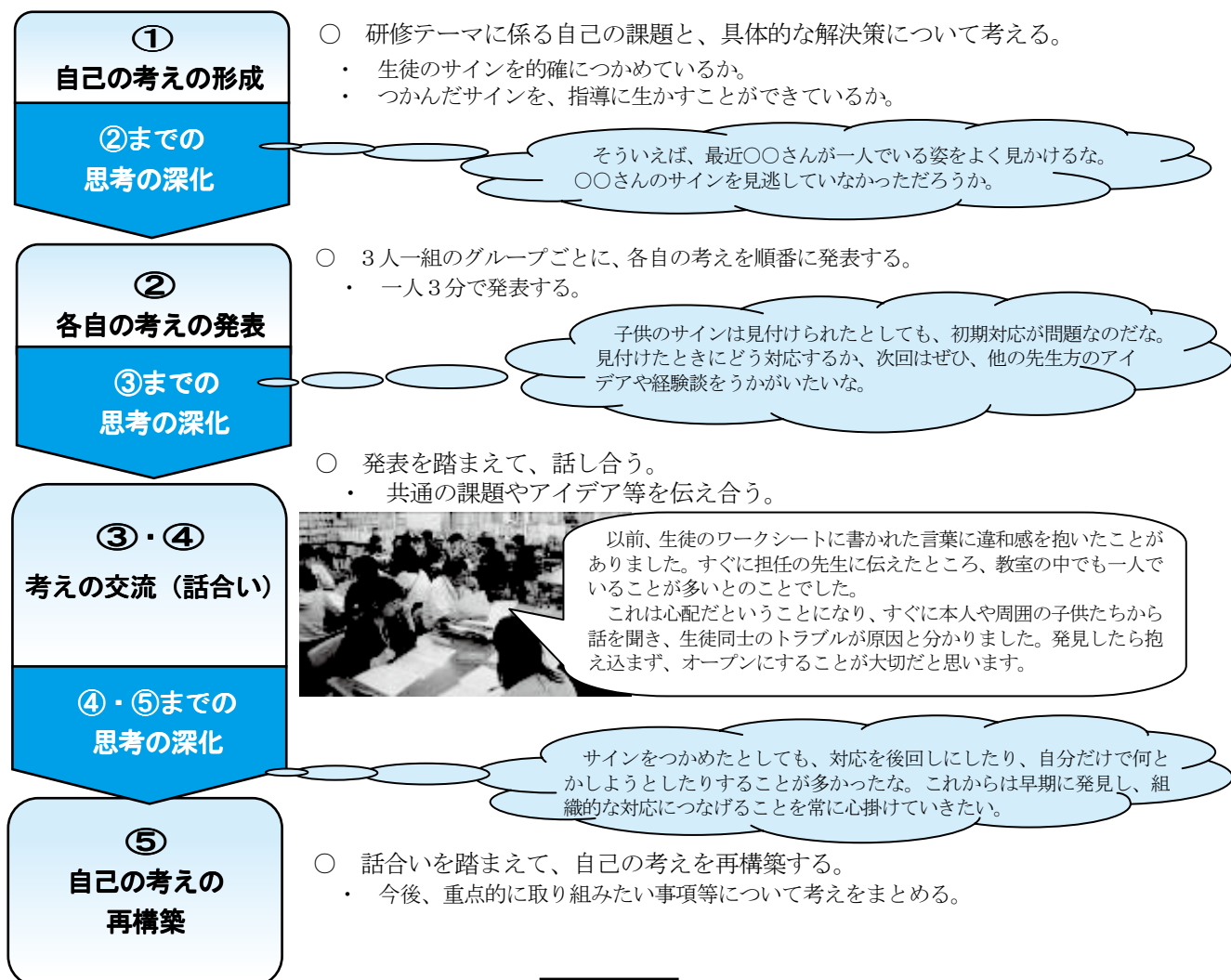
組織的な対応に向けて

校 長	副校長	分掌のリーダー (主幹教諭等)	教 諭
○ 教員の資質・能力に係る課題の把握 ○ 研修テーマ及び研修計画に関する指導・助言 ○ 研修成果の把握	○ 研修の企画・運営に関する研究主任への指導・助言 ○ 「ユニット研修」の時間設定に係る教務主任への指導・助言 ○ 研修効果の検証	○ 研修の企画・立案 ○ 各ユニット研修間で、教師の思考の深化を促す働き掛け	○ 研修の実施 ○ 各ユニット研修間での思考の深化

具体の活動場面

◆ 研修テーマ「生徒の心のサインをつかむための具体的な方策について考える」

＜配布資料＞「子供の心のサインをつかみ、指導に生かしましょう」平成24年度所報「たまじむ」第1号（東京都多摩教育事務所）



◆ 取組の成果

- これまでの校内研修で発言の少なかった教師も、準備した内容を自ら進んで発表していた。
- 次回のユニット研修に向けて、主体的に話し合う姿が見られるようになった。

考 察

現在、学校では経験豊かな教師が退職し、若手教師が激増している。また、学校教育を巡る課題は一層多様化・複雑化し、研修の重要性は増す一方であるが、授業時数の増加等により、研修時間の確保が困難な状況にある。

そこで本事例では、15分を単位時間とした研修を複数回実施し、一度に行うよりも高い効果を得ることをねらった。研修テーマに関する「自己の考えの形成」、「各自の考えの発表」、「考えの交流（話し合い）」、「自己の考えの再構築」という四回の「ユニット研修」を毎週、計4週間にわたって実施した。

実施上の要諦は、それぞれの「ユニット研修」の間で、個々人の思考の深化を促進させることにある。そのため、研究主任は研修を実施するに当たり、4回に分けて実施する意義とねらいの周知を図るとともに、毎回、次の研修会までに各自が準備すべき内容について伝えた。

各校が、本事例を実施するに当たっては、一グループの人数を3・4名にすることで、参加者全員が主体的に話し合いに参加できる体制をつくることが重要である。

地域の教育資源を有効活用するシステムの構築

事例5

— 全教師が関わる職場体験学習 —

「言葉の力」で

地域の教育資源を

生かす

ねらい

職場体験学習において、全ての教師が職場を担当することにより、異動に関わらず、体験先を確保し、生徒がより多くの職場を選択できるようにする。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	<体制づくり> ○ 全教師が一人一箇所以、担当する職場を決定する。 ○ 前年度から引き継いだ「職場体験カード」を基に、職場の担当者に体験学習の趣旨や流れを説明し、協力を依頼する。 ○ 指導を担当する生徒に係る情報を整理する。	【考える】 ◆ 担当する職場の情報や指導上の留意点を把握する。 【表す】 ◆ 体験学習の趣旨、職場への依頼内容等を相手に分かりやすく説明する。
2	<体験中> ○ 体験先への訪問や連絡を通して、生徒の学習状況や、職場の担当者の思いや願いを把握する。 ○ 訪問時には、担当する生徒に励ましの言葉を掛けるとともに、必要に応じて指導を行う。 ○ 指導を担当する生徒の学級担任に、職場先での学習状況について伝える。	【想像する】 ◆ 生徒の職場での様子から今後の状況を想定し、必要な手だてを講じる。 【感じる】 ◆ 職場の担当者の思いや願いを感受する。 【表す】 ◆ 学級担任に、職場での学習状況をより具体的に伝える。
3	<体験後> ○ 「職場体験カード」を作成する。	【表す】 ◆ 端的に記述する。

組織的な対応に向けて

校 長	副校長	分掌のリーダー (主幹教諭等)	教 諭
○ キャリア教育の全体計画作成指示及び指導 ○ 職場体験学習の意義とねらいの周知(教師・保護者・地域住民) ○ 学校だより等による学習成果の発信	○ 職場体験学習の企画・運営に係るリーダー層への指導・助言 ○ 商工会議所等への趣旨説明及び協力依頼 ○ 進行管理	○ 実施計画の立案 ○ 各担当者の決定 ○ 各職場との連絡・調整及び進行管理 ○ 実施状況の把握及び指示	○ 職場との連絡・調整 ○ 体験の視察及び指導 ○ 体験先のニーズ等の把握

具体の活動場面 【取組 1、2】

取組 1 体制づくり

【4月】分掌リーダー

- 職場体験学習の概要を職員会議で提案
- 各教師の担当先を調整の上、決定

【4～7月】各担当教師

- 職場への挨拶（訪問）
- これまで継続して訪問している職場に対しても、新たに依頼。前年度の取組を踏まえた職場の要望等を丁寧に聞き取り、取組に反映
- 職場の決定に向けた生徒との面談

【実施2週間前】

- 職場への挨拶（電話）
- 担当する生徒への指導
 - ・ 職場からの注意事項
 - ・ 体験先における所作等



取組 2 体験中

- 職場を訪問し、担当者から生徒たちの体験状況等について聴取
- アンケート調査への協力を依頼し、次年度に向けての受け入れを依頼

事業所名	〇〇〇〇
連絡先	〇〇〇〇-〇〇-〇〇〇〇
担当者名	〇〇さん
体験時間	9:00～15:00
弁当の要・不要	要
服装	制服
持ち物	タオル
受け入れに 当たっての条件	意欲をもった責任感のある生徒
受け入れ人数	3人
体験内容	・ コーヒーの調合 ・ 店内の清掃
訪問の際の 生徒の取組状況	・ 店のコーヒーの味を左右する重要な仕事を任せ、主体的に取り組んでいた。 ・ お客さんが少ない時間帯であったが、「楽しい」とのことであった。
職場の 受け入れ状況	・ スモールステップで課題を与え、ほめ励まして、学習意欲を高めてくださっていた。 ・ シフトの状況によっては受け入れが難しいとのこと。
次年度以降の 受け入れの可否	可
職場担当者の感想	とてもよい取組だと感じました。3人の生徒の真剣な姿勢に驚きました。店側も気付かされることや発見が多々あり、良い経験になりました。
その他 (改善点、引継ぎ事項など)	保険加入の証明書の提出が必要である。

◆ 取組の成果

- 全教師が職場を担当することにより、学年の枠組を超えて協同する意識がより強固になった。そのことは、校内研究等への取組にも波及し、教師間のコミュニケーションがより活性化した。
- 各教師が担当する職場が1・2箇所となり、より細やかな連絡・調整を行うことができた。その結果、生徒の学習状況や職場も把握することができ、次年度に向けた改善につなげることができた。
- 毎年継続して受け入れてもらっている職場に対しても、趣旨を丁寧に説明し、真摯に依頼することの大切さを実感したという声が聞かれた。受け入れてもらうことを当たり前と捉えず、職場の要望や期待を聞き取りながら、学校の意向も分かりやすく伝える中で、学校と体験先の職場との信頼もより深まっていた。

考察

現在、多摩地区の多くの小・中学校が、職場体験学習を行っている。その大半は、該当学年の教師が、職場をそれぞれ分担して受け持ち、指導に当たっている。

受け入れ先の職場の担当者は固定していても、担当教師は毎年変わる。学校側の引き継ぎが十分でない場合、職場の要望や期待に添えない事態も生じている。

そこで本事例では、全ての教師が、自分の担当職場をもち、毎年、職場との折衝や生徒指導に当たった。担当者同士のコミュニケーションが積み上げられ、確実に成果と課題の共有が成されたため、より効率的・効果的な取組の実現につながった。また、生徒が選択する職場数も増えた。

職場体験学習に限らず、学校には毎年実施する教育活動のうち、個々の児童・生徒の興味・関心に沿って地域の教育資源を複数活用して実施するものがある。本事例のように、全校体制で指導するシステムを構築することで、教育資源のより一層の有効活用が実現するものとする。

郷土の伝統・文化の教材化

事例 6

― 伝統芸能の保存会との協同 ―

「言葉の力」で

地域の教育資源を

生かす

ねらい

学校と地域が連携して地域の教育資源の教材化及び指導計画の作成を行うことで、地域の教育資源を生かした教育活動の一層の充実を図る。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	＜教育資源の発掘＞ ○ 郷土の伝統・文化について情報収集を行う。 ・ 市役所の生涯学習部等への取材 ・ 地域のフィールドワーク	【考える】 ◆ 学校教育に取り入れたい郷土の伝統・文化について考える。
2	＜教育資源の教材化＞ ○ 伝統芸能の保存会を訪問し、教材化に向けた協議を行う。 ・ 学校からのねらい等の説明 ・ 保存会の要望等の聞き取り ○ 保存会の会員をゲスト・ティーチャーとして迎え、授業を実施する。 ○ 授業の実施状況を踏まえ、保存会の方と教材を作成する。	【考える】 ◆ 児童の知的好奇心を喚起し、探究しがいのある内容・構成になるよう工夫する。 【想像する】 ◆ 教師が教材を活用する場面を思い描く。 【感じる】 ◆ 相手の表情やしぐさから、言外の思いを察する。 【表す】 ◆ 協議の際、児童の実態等を分かりやすく伝える。
3	＜開発した教材を活用した授業研究＞ ○ 保存会の会員に授業を参観してもらい、協議会で教材の活用方法等について意見を聞き、授業改善に生かす。	【考える】 ◆ 教材のより適した活用方法について考える。

組織的な対応に向けて

校 長	副校長	分掌のリーダー (主幹教諭等)	教 諭
○ 郷土の伝統・文化を生かした学校づくりの方針の提示（学校経営計画） ○ 学校だより等による取組状況の発信	○ 市役所や保存会等、外部機関との折衝 ○ 教材化に係る分掌のリーダーへの指導・助言 ○ 教材を活用した授業の実施に係る指示及び評価	○ 外部機関との折衝に係る副校長の補佐 ○ 教材作成に係る計画の立案及び進行管理 ○ 授業研究の企画・運営	○ 市役所等への取材 ○ 保存会と協同した教材の作成 ○ 教材を活用した授業の実施 ○ 研究協議会での意見を踏まえた教材の活用方法等の見直し・改善

具体の活動場面 【取組2】

取組2 地域の教育資源の活用

参考：あきる野市立一の谷小学校「引田の伝統芸能 囃子 獅子舞」

- 担当教師が保存会を訪問し、囃子と獅子舞の稽古を見学、全学年で実施することを踏まえ、稽古を体験した。
- 稽古の後、保存会の方から、低・中・高学年ごとに取り組むべき内容について意見をうかがった。

《教師》

囃子と獅子舞はどちらも子供たちが楽しく取り組めると思います。
どちらかと言うと、獅子舞の方が難しいですね。

《保存会の方》

囃子でしたら、低学年の子供たちも楽しく取り組めそうですね。
獅子舞は動きがダイナミックで、高学年向きだと思います。

子供たちに教えに行きますよ。

ぜひ、よろしくお願いします。私たち教師も、引き続き習いに行って
よろしいですか。

- 指導方法を習得するため、音楽担当の教師をはじめ、複数の教師が月 2 回、稽古に通った。その際、教師から保存会の方に教材づくりについて協力を依頼した。稽古前の 30 分と放課後を利用して、協同で教材を作成することになった。

伝統芸能は、口伝なのです。全学年、学級担任が指導するとなると、テキストが必要になると思います。ぜひ、作成したいのですが、御指導願えますか。

もちろんです。テキストがあれば、お稽古に来ていない先生でも指導できますね。6年間にわたってお囃子と獅子舞に親しんでもらえるなんて、うれしい限りです。



プラスチック製の植木鉢を組み合わせで作った鼓



＜教材の主な内容＞

- ・ 口伝の太鼓や鐘のリズム
(言葉、記号で表す。)
- ・ 太鼓や面の作り方
(身近な素材を用いる。)
- ・ 用いる小道具や衣装



学校用テキスト

ツケ

・テケ ・天ツク	・テケ ・天ツク
・テレツク	・テレツク
・天ツクツ	・天ツクツ

◆ 取組の成果

- 伝統芸能の保存会の方との対話は、教師が知らなかった教育資源を学ぶ機会になるとともに、学校が地域と連携して、教育資源を継承していく方策を考えていくことができた。具体的には、地域に囃子を習いに行ったり、歴史・文化を調べたりすることを通して、地域の伝統・文化を児童に指導していきたいという意識をより強くもつことができた。

考察

多摩地区には、地域に伝わる伝統芸能が多数ある。それらを小・中学校の教育課程に取り入れ、計画的・系統的に指導することは、郷土に対する愛着や誇りを育む上で極めて有効である。しかしながら、伝統芸能は口伝えが基本であるため、楽譜などの資料がなく、専門家に直接指導を受けることが必要である。

本事例では、地域の保存会の協力を得て、低学年でも分かる楽譜、踊りの絵図、面の作り方、太鼓のたたき方などを記したテキストを学校が作成した。

テキストを活用することで、教師の指導の下、低学年は囃子「にんば」のリズム、第3学年は囃子「にんば・おかめ・ひょっこ」、第4学年は囃子「屋台・天狐」、第5学年は獅子舞「御神楽」、第6学年は獅子舞「四つ花」を、それぞれ前年度までの学習を生かして、児童が自主的・自発的に学習に取り組むことができた。

各学校が、本事例のように地域の伝統・文化を教材化するに当たっては、地域の保存会等と十分に連携しながら、児童・生徒の心身の発達の状況や地域の伝統・文化に対する理解の程度にに応じて、教材の表現や内容の難易、分量の多少等に配慮する必要がある。

②「言葉の力」で深める

(1) 児童・生徒との信頼関係

教育の基盤は、信頼関係にあります。教師が児童・生徒から信頼されるべきことは言うまでもありません。「教育(educate)」という言葉には、「引き出す」という意味があります。大切なのは、どのような状況においても、教師が児童・生徒の成長を信頼して教育活動に当たることです。

ア 課題

人権を侵害する教師の言動等により、児童・生徒との関係を築けなかったり、日頃の人間的な触れ合いが十分でなく、心のサインをつかめなかったりすることがあります。

イ 解決の方向性

教師が児童・生徒との信頼関係を築くには、何より、学びがいのある授業を行うことが重要です。日々の授業における充足感・成就感を生み出す指導こそが、児童・生徒の信頼の基盤となります。その上で、日頃の人間的な触れ合いに基づくきめ細やかな指導や、児童・生徒の内面を共感的に理解しながら話を聞き、児童・生徒と共に考え、歩む姿勢が求められます。

他の児童・生徒との比較ではなく、自分の努力や進歩の状況を適時適切に評価し、賞賛や励ましの言葉を贈ってくれる教師に、児童・生徒は心を開きます。一方、児童・生徒の不正や反社会的行動に対しては、その行動に至った背景や原因を十分に把握した上で毅然とした説諭を行うことが、当該の児童・生徒はもとより、他の児童・生徒との信頼関係を築くことになります。

なお、個々の教師と児童・生徒との関係は、教師集団に対する信頼の上に成り立っています。体罰等の服務事故をなくすだけでなく、児童・生徒から学び、成長し続ける教師集団、危機に際しては校長を中心に迅速に対応する機動的な組織をつくることが重要です。

ウ 実践事例

事例7 挨拶プラス一言運動 — 共感を呼び、意欲を高める言葉掛け —

事例8 いつでも誰にでも相談週間 — 話を傾聴し、考えを引き出す —



(2) 保護者との信頼関係

保護者との信頼関係の鍵を握るのは、学級担任と教科担任、校長を中心とした組織体制です。一人一人の児童・生徒を大切にする学級づくり、学力を着実に育む授業づくり、事件・事故発生時の迅速かつ適切な対応の実施が、保護者からの信頼を高めます。

ア 課題

家庭の要望や意見等を把握して教育活動に生かすということが十分できていない、相互の意思疎通を図ることが十分でないため、保護者からの信頼を得られないといった課題が見られます。

イ 解決の方向性

保護者は我が子に関わりのある「よい情報」を得ることで、学校に対する信頼を高めていきます。したがって、学級担任と教科担任はもとより、学年の教師、養護教諭、部活動の顧問教師などが、日

頃から児童・生徒のもつよい点や可能性、進歩の状況等に関わる情報を共有し、学校だよりや学年・学級通信、保護者会、日々の電話連絡などを通して、発信し続けることが大切です。

また、保護者は、学校が教育方針や特色ある教育活動などについて分かりやすく説明して理解や協力を求めたり、学校運営などに対する保護者の意見を把握して、教育活動に生かしたりすることを求めています。学校が保護者に学校や学年、学級の経営方針等を説明する際には、教師にしか分からない専門用語は用いず、分かりやすく表現することが必要です。また、学校評価の取組を保護者等との対話の機会と捉え、自らの教育活動や学校運営に対する理解と参画を得、信頼される開かれた学校づくりを進めることが大切です。

なお、危機発生時には、全教職員が一丸となって対応し、適時適切に保護者に必要な情報を提供しながら開かれた取組を展開することが、保護者の信頼の獲得につながります。

ウ 実践事例

事例9 「行きたい」、「来てよかった」、「行って得した」保護者会 ― 学校と家庭のコミュニケーションの活性化 ―

事例10 保護者との協同による体験型講座 ― 教師と保護者の趣味・特技を生かしたPTA活動 ―

(3) 地域との連携

真の連携とは、双方にとってメリットがあり、長続きのする取組を指します。学校と地域の企業や関係諸機関等が互いの願いを正しく理解し合い、ねらいを無理なく達成できるよう、相互に情報の収集・発信を行うことが重要です。

ア 課題

学校は、「開かれた学校」の構想が最初に打ち出された臨教審第3次答申（昭和62年）以来、地域に連携を働きかけてきました。しかしながら、学校が地域の要望や意見等を十分に把握せず、期待に応えることができないなど、一方的な取組に終わりがちで、真の連携には至っていない場合が未だ見受けられます。

イ 解決の方向性

「言葉の力」を中核に据えた学校づくりを行う上で、地域との信頼関係を深める主な観点は次の四つです。

第一に、教師の意識改革。「生きる力」の育成は、学校だけでできるものではありません。地域との連携が不可欠であることを全ての教師が理解することが必要です。

第二に、組織づくり。これまでの多くの学校では、分掌ごとに地域との関わりをもってきました。例えば、従来の各分掌の個別の対応を地域連携委員会（仮称）等の組織が吸収し、中・長期的展望をもった学校としての取組を行うことです。

第三は、情報交流のシステムづくり。学校だよりや学年・学級通信、学校のホームページ等により、情報を発信するだけでなく、地域からの情報を受け止め、活用していきます。

そして第四は、学校評議員制度の有効活用。学校経営上の校長の権限・責任を前提として、校長を支援する学校評議員の役割を高めるためには、学校経営計画の明確な方針設定と、何をどのように協力を依頼するのかを絞り込むことが必要です。

ウ 実践事例

事例11 学校評議員との一層の連携 ― 教師と学校評議員の懇談を通して ―

事例12 双方にメリットのある教育活動 ― 学校と地域、双方にメリットのある教育の推進 ―

挨拶プラス一言運動

事例 7

－ 共感を呼び、意欲を高める言葉掛け －

「言葉の力」で

児童・生徒との信頼関係を

深める

ねらい

教師が児童のよい点等を褒め励ます言葉掛けを行うことで、児童との信頼関係の基盤を築く。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	<共通理解> ○ 「挨拶プラス一言運動」のねらいについて共通理解を図るとともに、児童一人一人のよい情報を収集し合う。	【考える】◆ 「挨拶プラス一言運動」の趣旨を理解する。
2	<情報共有> ○ 児童の関心事や頑張っていること、よい点や進歩の状況などについて、「プラスカード」を活用しながら情報を共有する。	【考える】◆ 児童のよい点や進歩の状況を捉える。 【想像する】◆ 実際の言葉掛けを思い描く。
3	<挨拶運動の実施> ○ 教師が児童と挨拶を交わす際、当該の児童が喜び、勇気付けられるような言葉を添える。	【考える】◆ 児童が共感し、意欲を高める言葉掛けを工夫する。 【感じる】◆ 児童の気持ちを感受する。 【表す】◆ 児童が喜ぶ言葉を端的に伝える。

組織的な対応に向けて

校 長

- 教師の児童に対する積極的な言葉掛けを、生活指導の重点として設定
- 生活指導部に対して「挨拶プラス一言運動」の計画立案及び実施を指示

副校長

- 「プラスカード」作成に係る時間確保（教務主任への指導）
- 「挨拶プラス一言運動」の観察・評価

分掌のリーダー （主幹教諭等）

- 「プラスカード」の作成指導
- 取組の評価・改善に係る指導・助言

教 諭

- 児童に係る情報の収集・整理
- 「挨拶プラス一言運動」の実施
- 取組の評価・改善

いつでも誰にでも相談週間

事例 8

－ 話を傾聴し、考えを引き出す －

「言葉の力」で 児童・生徒との信頼関係を 深める

ねらい

児童の悩み等を早期に発見して対応するため、相談しやすい環境づくりを行うとともに、コーチングの手法を生かした相談活動を実施する。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	＜コーチングの手法の理解＞ ○ スクールカウンセラー等を講師とする、研修会を実施する。	【考える】 ◆ コーチングのポイントを理解する。 【想像する】 ◆ コーチングの手法を生かし、児童と面談する状況を思い描く。
2	＜相談週間の設定＞ ○ 全教師が学年・学級の枠組を超えて児童の相談を受ける。	【考える】 ◆ 児童の考えを引き出す対話のやりとりを工夫する。 【感じる】 ◆ 児童の不安や悩み等の心情に共感する。 【想像する】 ◆ 児童の置かれている状況を思い描く。 【表す】 ◆ 児童に対して、共感の思いを言葉で伝える。
3	＜日常の対話の促進＞ ○ 日頃から、教師は児童の話を傾聴し、コーチングの手法を生かして考えを引き出す対話を進める。	【考える】 ◆ 児童の考えを引き出す対話のやりとりを工夫する。 【感じる】 ◆ 児童の気持ちを感じ取り、共感する。 【想像する】 ◆ 児童が求めていることについて思い描く。

組織的な対応に向けて

校 長	副校長	分掌のリーダー (主幹教諭等)	教 諭
○ 教育相談に係る基本方針の提示(学校経営計画) ○ 全校朝会で、「いつでも誰にでも相談週間」の趣旨を児童に説明 ○ 学校だより等による家庭への趣旨説明 ○ 相談内容の把握	○ 分掌のリーダー及びスクールカウンセラー等との連絡調整 ○ 進行管理	○ 面談の企画 ○ コーチング等の研修会の企画・運営	○ 面談の実施 ○ 事後の情報共有 ○ 学級担任やスクールカウンセラー等と対応策を検討 ○ 取組の評価・改善

具体の活動場面 【取組 1、3】

取組 1 コーチングの手法の理解

- 年度当初（5月上旬）に、スクールカウンセラーを講師として、コーチングについて学ぶ研修会を実施した。

※ コーチングとは、相手の考えを引き出し、自ら考え、行動することを促すコミュニケーション・スキルである。

※ 現在、文部科学省の外郭団体が、コーチングを資格として認定している。質問の仕方や話の聞き方など、訓練を受けたコーチが全国的に活動している。そうしたコーチから、コーチングの基本技能を直接学ぶことは効果的である。

児童の考えを引き出すことが大切なのね…。

コーチングのポイントは……



〈コーチングのポイント〉

- ◆ 答えは相手の中にある。
- ◆ 相手には課題を解決する能力がある。
- ◆ 答えや能力を引き出すプロセスがコーチングである。

※ 詳しくは、多摩教育事務所ホームページに掲載中です。

<http://www.tamajimu.metro.tokyo.jp/>

取組 3 日常の対話の促進

- 面談中は、各教師が、あいづちを打ちながら聞き、相手の訴えを分かろうとする態度を示すこと、相手の言葉や思いを繰り返すこと、相手の訴えを整理して、はっきりさせること、「でも」など、相手の言葉をさえぎる言葉を使わないことを共通に心掛けた。
- 「傾聴」のポイントとして、①先入観をもたない、②質問を控える、③相手の評価や批評をしない、の三つのことを共通に意識した。

先生に話してよかった。また相談してみよう。



◆ 取組の成果

(1) 教師について

- 年度当初に研修を実施したため、コーチングの手法を生かして児童の話を開こうという意識を日常的にもつようになった。児童との話が途切れたときも、児童が「考えている」「迷っている」のだと思い、あせらずに待つ姿が見られるようになった。一方的な説明や説得を行うのではなく、児童の発言を大切に受け止めようと努めるようになりつつある。

(2) 児童について

- 相談週間に限らず、学級担任以外の教師に話し掛けたり、相談したりする児童が増えた。また、相談後も継続して相談に訪れるケースが複数生じるようになった。
- 学校関係者評価において、「先生が子供の話をよく聞いてくれる」という質問項目に対する保護者の肯定的な評価が上昇した。

考 察

各種の調査結果によれば、児童・生徒が求めているのは、「話をよく聞いてくれる教師」である。

まずは、児童・生徒の話に耳を傾け、共感的な理解を示すことが重要である。その上で、対話を重ねる過程で、児童・生徒がもっている思いや考えを引き出す、そのことが「先生に話してよかった。また、相談してみよう。」と児童・生徒が心から思える関係づくりにつながる。教師は、自らの「言葉の力」を高め生かしつつ、児童・生徒の内面に対する共感的理解に基づく「傾聴」を重視する必要がある。

本事例では、学級担任に限らず、児童がいつでも誰にでも相談できる環境を学校として設定することで、学級担任とは必ずしも良好な人間関係が確立していない児童も、学校の誰かに相談することができ、「先生は、私の気持ちを分かってくれた。」と児童が実感することにつながった。また、友達がいじめられていやな思いをしているので助けてほしい、との訴えもあり、いじめ問題の解決にも資する取組となった。

なお、各学校が本事例を実践するに当たっては、全教師が取組の趣旨を共通理解し、相談期間中の相談活動を他の業務より優先すること、相談内容は学級担任と共有することが重要である。

「行きたい」、「来てよかった」、「行って得した」 保護者会

事例 9

－ 学校と家庭のコミュニケーションの活性化 －

「言葉の力」で 保護者との信頼関係を 深める

ねらい

保護者が参加してよかったと思える保護者会を企画・運営することで、信頼関係を深める。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	＜テーマの設定＞ ○ 年度当初、保護者が得たい情報及び話題にした い内容等についてアンケート調査を行う。 ○ テーマについてPTA運営委員会等で協議し、 決定する。 ○ 保護者会のねらい等を学校便りで周知する。	【考える】 ◆ 保護者のニーズを的確に捉える。 ◆ ニーズに合った保護者会を企画す る。 【想像する】 ◆ ニーズに合った運営を思い描く。
2	＜保護者会の実施＞ ○ 保護者会の「話題源」となるテーマの関連資料 を配布し、教師が説明する。 ○ 4・5名のグループごとに意見交換を行う。	【感じる】 ◆ 保護者の気持ちを感じ取り、共感 する。 【表す】 ◆ 保護者に伝わる言葉で説明する。 ◆ 保護者の意見を引き出しながら会 を進める。
3	＜次回に生かす＞ ○ 保護者対象のアンケートを実施し、次回の保護 者会の運営に生かす。 ○ 学年通信で保護者会の実施結果を掲載し、次回 の参加を促す。	【考える】 ◆ アンケート結果を基に、課題と解 決の方向性について考える。 【表す】 ◆ 保護者会の様子が伝わる記事を書 く。

組織的な対応に向けて

校 長	副校長	分掌のリーダー (主幹教諭等)	教 諭
○ 保護者会のねらいをPTA運営委員会で説明 ○ 保護者会の全体会で意見交換の趣旨説明 ○ 保護者会の参観 ○ 学校だよりの発行	○ 保護者会開催についての周知 ○ 分掌のリーダーとの連絡調整 ○ 進行管理 ○ 保護者会の配布資料及び運営方法等に係る指導・助言	○ 保護者会の企画 ○ 配布資料の作成に係る指導	○ 配布資料の作成 ○ 保護者会の実施 ○ 取組の評価・改善

具体の活動場面 【取組 1、2】

取組 1 テーマの設定

- 年度当初、保護者会の年間計画を作成し、全教師間で情報共有した。
- 事前に、PTA運営委員会で話し合い、学年ごとにテーマを決定した。学校と家庭とが互いに協力合うことで、より高い効果が期待できる取組について意見交換を行うこととした。
- 各学年が保護者会で配布した資料は、職員室で一括管理し、互いに活用できるようにした。

開催月	学校からの説明内容	意見交換会のテーマ
4月	学校の基本方針（校長） 学年の基本方針（学年主任） 生活指導について（生活担当）	子供の自尊感情を育む 〔低学年〕手伝い 〔中学年〕褒め上手は育て上手 〔高学年〕夢や希望を育てる
7月	1学期を振り返って（学年主任）	
⋮	⋮	

取組 2 保護者会の実施

- 各学年とも、保護者が自分の考えを書き込めるワークシートを活用した。



資料提供：東村山市教育委員会

「ほめ上手は育て上手」意見交換シート
～「親と子のこころの対話（家庭教育の手引き）」より～

- ① 最近、お子様をどのようなことで褒めましたか。
- ② お子様を褒めるときには、どんなことに気を付けていますか。
- ③ 御自身はお子様の頃、どんなことで褒められましたか。思い出の一つを教えてください。

【意見交換メモ】



◆ 取組の成果

(1) 教師について

- 学校が一方向的に伝達するのではなく、保護者会のニーズを把握し、願いや気持ちを受け止めることで、双方向のコミュニケーションが活性化した。
- 保護者に分かりやすく伝えるために、教師が主体的に情報収集に努めるなど、保護者会の運営について意識改革が図られた。

(2) 保護者について

- 保護者にとって関心の高い事柄を意見交換のテーマに設定することで、積極的に意見交換を行う姿が見られた。保護者からは「自分一人が悩んでいるのだと思っていたが、多様な意見が聞けて参考になった。」等の回答が多数寄せられた。
- 保護者が自らの考えをワークシートにメモする時間を十分に確保したところ、活発な協議が実現した。
- 保護者会への参加人数及び教師に気軽に相談を寄せる保護者が増加した。

考 察

保護者会は、学級担任と保護者、保護者同士のコミュニケーションの場である。しかしながら現実には、学校から保護者への一方的な伝達の場となったり、話し合う時間は確保されていても、テーマが保護者のニーズと合致せず、十分な意見交換がなされなかったりすることがある。こうした保護者会では、参加者の人数は減る一方である。

本事例では、学校が事前に保護者に対して話し合いたいテーマについて調査を行い、テーマごとに小グループを編成して協議を実施した。実施に当たっては、ワークシートを作成・活用し、保護者が考えを深め、話し合いやすくなるよう工夫した。自ら思考、判断し、表現し合う場面を中心とする参加型の保護者会に、保護者たちは皆積極的に参加し、活発な議論が交わされた。

各学校が本事例を実施するに当たっては、テーマの決定やワークシートの作成を学校として行い、児童・生徒の発達段階や学年ごとの課題に即した内容にすることが重要である。また、保護者のグループ編成を3・4名とし、全員が主体的に参加できるようにしたい。

保護者との協同による体験型講座

事例 10

― 教師と保護者の趣味・特技を生かしたPTA活動 ―

「言葉の力」で

保護者との信頼関係を

深める

ねらい

教師及び保護者が、趣味・特技を生かした体験型講座を協同で実施することにより、信頼関係を深める。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	<講座開設準備> ○ 職員会議で概要について協議する。 ○ PTA運営委員会で意見交換を行う。 ○ 年度当初の保護者会で、PTA会長から体験型講座のねらいと概要について説明し、協力を依頼する。 ○ 決定した講座一覧を掲載し、受講生を募る。 ○ 3年間で全教師が講座を実施するよう計画を立てる。	【考える】 ◆ 保護者が気軽に楽しく受講できるような講座を考案する。 【感じる】 ◆ 保護者のニーズを感受する。 【想像する】 ◆ 保護者が体験を通してどのような感想をもつか予想する。
2	<講座の実施> ○ 教師と保護者が協同し、体験型講座を開催する。	【想像する】 ◆ 保護者の表情や態度から言外の思いを察する。 【表す】 ◆ 保護者に分かりやすいよう、専門用語等は使わずに説明する。
3	<次年度に向けて> ○ 事後のアンケート結果を次年度の活動に生かす。 ○ 学校だよりにより教師及び保護者の感想等を掲載し、次年度の参加を促す。	【考える】 ◆ より効率的で実効性のある企画・運営について工夫する。

組織的な対応に向けて

校 長	副校長	分掌のリーダー (主幹教諭等)	教 諭
○ PTA会長と講座の実施について協議 ○ PTA運営委員会における協力依頼 ○ 学校だより等による成果報告	○ 講座の実施計画案の策定指導 ○ PTA役員との連絡調整 ○ 進行管理	○ 実施計画の作成 ○ 保護者向けのチラシ作成及び参加者募集 ○ 事後アンケートの集約 ○ 次年度計画の立案	○ 講師及び受講者としての参加 ○ 取組の評価・改善

具体の活動場面 【取組 1、2】

取組 1 講座開設準備

- 教師及び保護者が互いの趣味や特技を生かして、気軽に楽しみながら望ましい関係づくりを行うことをねらいとし、諸準備を行った。
- 3年間で、全教師が講師を担当するよう計画を立てた。

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
担当職員 (講座内容)	A校長 (バタールゴルフ) C教諭 (絵手紙) ⋮	B教諭 (合唱) E教諭 (植物栽培) ⋮	D副校長 (テニス) F主幹教諭 (ギター) ⋮

- PTA役員会・運営委員会において副校長が説明し、保護者の協力を求めた。保護者が開設できる講座について情報収集を行うとともに、当日の運営方法等について協議した。



今年から教師及び保護者の皆様の互いの趣味や特技を生かし、互いに協力し、体験型講座を実施したいと考えております。教師については事前に趣味・特技を調査し、3か年計画を立てました。
つきましては、保護者の皆様と力を合わせて成功させたいと思いますので御協力をお願いするとともに、忌憚のない御意見を頂戴できれば幸いです。

- 講座を担当する教師は、保護者会（全体会又は学級懇談会）で講座内容（趣味・特技等）について説明した。

取組 2 講座の実施

教師：保護者の意外な一面を見ることができた。

教師：学校では見ることのできない家庭での子供の様子を知ることができた。



保護者：自分の好きな事を担任の先生と一緒に取り組めてよかった。

保護者：自分が担当した講座に学年主任の先生が参加してくれた。今後、何かと相談しやすくなった。

◆ 取組の成果

(1) 教師について

- 児童から講座の様子を質問された教師がいた。家庭でも話題になっていたことを知り、ほほえましく思ったとの報告があった。本取組は、教師と保護者はもとより、児童とのよい関係づくりのきっかけとなった。
- 講座を実施した後、保護者からの相談が増えた。

(2) 保護者について

- 保護者から、「楽しい講座の実施に向け、一緒に取り組むことができてよかった。」「授業参観や保護者会では見られない先生の姿を目の当たりにすることができ、より身近に感じられるようになった。」等の声が寄せられた。本講座を実施することで、教師への親近感が確実に高まったと考えられる。

考 察

PTAは、児童・生徒の健やかな育成を願って保護者と教師が対等に組織し共に学び、活動する団体である。しかし、一般に活動するのは保護者会員、しかも代表役員で、教師側は副校長や校長等が必要に応じて指導・助言を行うといった程度の場合が多い。

本事例では、保護者と教師の積極的な参加及び交流をねらいとし、各自の得意分野や興味・関心を生かした体験型講座を開催した。講師は教師だけでなく保護者も務め、講座の企画・運営には代表役員が当たった。講座内容は教養娯楽に関するものとし、会員間の楽しい活動になるようにした。参加した保護者からは「教師の新たな一面を知り、より身近に感じられるようになった。」、教師からも「互いに胸襟を開いて語り合う機会にもなった。」との感想が寄せられた。講座内容に限らず、普段の児童の様子等についても情報交換を行う場となり、その後の家庭と学校との連携がより円滑に図られるようになった。

本事例を実践するに当たっては、年度当初に講座開催のねらいを全会員に周知し、より多くの講師を確保することが大切である。

学校評議員との一層の連携

事例 11

－ 教師と評議員との懇談を通して －

「言葉の力」で

地域との連携を

深める

ねらい

学校評議員（以下「評議員」という。）との懇談を通して、学校の教育活動や教師の思いや願いを伝え、より一層の理解・協力を得る。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	＜学校評議員会及び懇談会についての共通理解＞ ○ 全教師が学校評議員会（以下「評議員会」という。）のねらい及び年間計画について共通理解を図るとともに、懇談会のテーマについて協議する。	【考える】 ◆ 学校経営計画を基に、懇談会のテーマについて考案する。 【想像する】 ◆ 年間計画の実施状況を思い描き、見通しをもつ。
2	＜評議員会及び懇談会の実施＞ ○ 学校経営計画の重点項目及び評議員会の年間計画について説明する。 ○ 懇談会を開催し、評議員の多様な意見を求める。	【感じる】 ◆ 評議員の思いを感じ取る。 【想像する】 ◆ 評議員の表情や態度から、言外の思いを察する。 【表す】 ◆ 評議員が理解しやすいよう、専門用語等を使わずに説明する。
3	＜次年度に向けて＞ ○ 今年度の評議員会及び懇談会の企画・運営について評価し、次年度の実施案を立てる。	【考える】 ◆ 今年度の評価を基に、より実効性のある評議員会及び懇談会の内容について考案する。

組織的な対応に向けて

校 長	副校長	分掌のリーダー (主幹教諭等)	教 諭
○ 懇談会の趣旨説明 (教師及び評議員) ○ 懇談会のテーマ決定に係る指導 ○ 懇談会で出された意見に係る学校としての取組を指示	○ 評議員会の年間計画の立案 ○ 評議員との連絡調整 ○ 懇談の概要を文書等にまとめ、全教師に周知	○ 懇談会の企画・運営 ○ 分掌ごとの取組及び課題を説明	○ 地域に対する思い、考えの懇談会における積極的な発信 ○ 評議員及び地域住民と共に授業を構想

具体の活動場面 【取組 2】

取組 2 評議員会及び懇談会の実施

- 年間2回、懇談会を開催し、評議員の意見を幅広く求めた。懇談会では、教師と評議員の忌憚のないやりとりを重視した。

「学校の基本方針説明」

- 学校経営計画の説明（校長）
- 重点項目「言語能力の向上」についての説明
（副校長及び担当教師）
- 懇談会のテーマ及びテーマに関する授業や学校行事の計画の周知

「第1回懇談会」

テーマ「言葉の力」

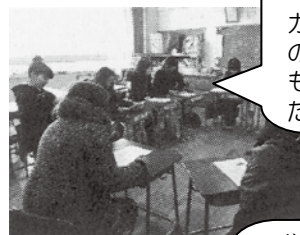
- 児童に身に付けさせたい「言葉の力」に関する意見交流

「授業参観及び第2回懇談会」

- 全学級の国語科の授業公開を実施
- 学校・家庭・地域がそれぞれ育む「言葉の力」について意見交流



今年度は、「言語能力の向上」を重点項目に置き、学校、家庭、地域で「言葉の力」について考えていきます。



子供たちの「言葉の力」だけでなく、教員の「言葉の力」の向上も大切だと思いました。



学校だけで「言葉の力」を育むのではなく、家庭や地域で育む「言葉の力」を考えていきましょう。

先生方の授業に対する熱い思いが伝わってきました。ぜひ、〇年生の授業に協力します。

◆ 取組の成果

（1）教師について

- 評議員への説明内容について事前に共通理解を図ることで、学校経営上の課題がより明確になった。
- 評議員と対話を行うことで、組織運営と人材育成に関する新たな視点をもつことができた。

（2）評議員について

- 「教師の願いがよく分かり、評議員として地域へ何をどのように働き掛けるべきか、具体的なイメージをもつことができた。『現行の学習指導要領が何を求めているのか、また、その実現に向け、先生方が一丸となって授業研究に取り組んでいることに感謝しました。今まで以上に授業に協力したいです。』という評議員からの声が寄せられた。

考 察

学校評議員会では、地域に開かれた学校づくりをより一層推進するため、校長の求めに応じて学校運営に関して意見を述べるができるようになってきている。しかしながら、多くの場合、評議員会の会議内容は、学校からの報告が大半を占め、意見の聴取や交換を行う時間はごく限られている。

そこで本事例では、年間2回、評議員と教職員との懇談会を設定し、多様な意見を幅広く求めた。年度当初、校長は学校経営計画の重点項目を基に、それぞれの懇談会のテーマを決定・周知するとともに、テーマに関する授業や行事、学校からの情報発信等の計画を伝えた。このことにより、評議員は懇談会の当日までに学校の実情等を把握し、自分なりの意見をもってより主体的に会に参加することができるようになった。テーマに関する学校・家庭・地域での児童の状況等が話題となり、評議員からは学校への協力事項が複数提案された。

各学校が本事例を実践するに当たっては、評議員に対して、懇談会のテーマに関する情報提供を計画的に行うことが重要である。

郷土の伝統・文化に学ぶ道徳授業地区公開講座

事例12

— 学校と地域、双方にメリットのある教育の推進 —

「言葉の力」で

地域との連携を

深める

ねらい

道徳授業地区公開講座で地域の伝統・文化を取り上げて、専門家を招へいすることにより、学校と地域との一層の連携を図る。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	<事前打合せ> ○ 今年度の道徳で重点とする内容項目等について地域住民に説明する。 ○ どのような内容で講座を実施するか決定し、地域住民に協力を依頼する。	【考える】 ◆ 地域の思いや考えを的確に捉え、道徳授業地区公開講座を企画する。 【感じる】 ◆ 地域の願いや思いを感じ取り、共感する。 【想像する】 ◆ 地域の人材や資源を教育活動にどのように生かしていけるか思い描く。 【表す】 ◆ 道徳教育の取組について分かりやすく説明する。
2	<道徳授業地区公開講座・授業公開> ○ 第1～4学年では内容項目4－(5)*、第5・6学年では内容項目4－(7)*を取り上げ、授業を行う。 ○ 自分たちの住む地域の伝統・文化を主体的に学ぶ児童を育てる。	【考える】 ◆ 児童が伝統・文化に触れ、地域のよさに気付けるような授業を組み立てる。 【感じる】 ◆ 地域の伝統・文化の価値に係る考えや思いを受け止める。
3	<道徳授業地区公開講座・意見交換会> ○ 学校・家庭・地域が連携して取り組めることについて、地域の伝統・文化に係る講演・実演を通して意見交換を行う。	【感じる】 ◆ 地域住民の願いや思いを感受する。 【表す】 ◆ 家庭及び地域の意見交換が活発になるよう会を進行する。
4	<地域との連携> ○ 道徳以外の教科等の指導において、地域の人材を生かす。 ○ 学校評価で項目を追加し、次年度の活動に生かす。	【考える】 ◆ 成果と課題を道徳教育全体計画に反映させる。

*第1学年及び第2学年内容項目4－(5)

郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。

*第3学年及び第4学年内容項目4－(5)

郷土の伝統と文化を大切にし、郷土を愛する心をもつ。

*第5学年及び第6学年内容項目4－(7)

郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。

「小学校学習指導要領解説道徳編」(文部科学省)

組織的な対応に向けて

校 長

- 道徳教育の基本方針の提示(学校経営計画)
- 各自治会長への協力依頼

副校長

- 実施計画の作成指示及び指導
- 講師等との連絡調整
- 道徳授業地区公開講座開催に係る広報
- 進行管理

分掌のリーダー (主幹教諭等)

- 道徳授業地区公開講座の実施計画の立案
- 学習指導案作成に係る指導・助言
- 意見交換会の運営

教 諭

- 道徳授業の実施
- 意見交換会の運営
- 取組の評価・改善

34

③「言葉の力」で高める

(1) 学力

各教科等の指導において、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、観察・実験やレポートの作成、論述といった知識・技能を活用する学習活動を充実させます。

ア 課題

現在、多摩地区の小・中学校では、国語科で育成した「言葉の力」を使いながら、各教科等で様々な言語活動を行っています。しかしともすると、手段であるはずの言語活動の充実が目的になってしまい、当該教科等に固有の思考力・判断力・表現力等を身に付けるといった本来のねらいが十分に達成されていない状況があります。

イ 解決の方向性

各教科等の授業に、当該教科等に固有の思考力・判断力・表現力等の育成を目指したクリティカル・シンキングを取り入れ、児童・生徒の言語活動の質を高めることが重要です。

クリティカル・シンキングを取り入れた授業とは、課題を解決するための学習過程において、児童・生徒が多面的・多角的な視点を持ち、メタ認知を働かせながら論理的思考を深める授業です。

ウ 実践事例

事例13 クリティカル・シンキングを取り入れた授業づくり — 小学校第2学年国語「書くこと」の指導 —

事例14 クリティカル・シンキングを取り入れた授業づくり — 中学校第1学年数学 習熟度別指導 —



(2) 人間関係形成能力

人間関係を円滑にするためには、相手の話を的確に聞き取ってその考え方を尊重しつつ、自分の考えを適切に表現して相互理解を図ることが大切です。そのために必要なコミュニケーション能力を育てることをねらいとした取組を組織的・計画的に進めます。

ア 課題

現代の小・中学生の多くは、友達や仲間のことで不安や悩みを抱えています。この実態の根底には、人と人との関係を円滑に調整するために必要なコミュニケーション能力の不足があります。筋道立てて分かりやすく話すことを苦手とする児童・生徒の会話は、単語の羅列や曖昧な受け答えに終始し、相手の気持ちを理解し合うといった本来の目的が達成されないことがあります。また、児童・生徒は気の合う限られた集団の中でのみコミュニケーションをとる傾向が見られ、コミュニケーションをとっているつもりが、実際は自分の思いを一方向的に伝えているに過ぎない場合が見られます。

イ 解決の方向性

実体験や対話によるコミュニケーションを通じて、集団の中での他者の存在を認識し、共に話し合い、学び合い、助け合うことの重要性を自覚させることが重要です。そのため、日常的なコミュニケーションの見直し・改善から始めて協同的な関係を築けるよう、学校の教育活動全体で計画的に指導する必要があります。

具体的には、相手や場に応じた言葉遣い、挨拶や依頼・感謝の言葉、互いを認め合い励まし合う言葉など、話し言葉の運用能力を育成します。また、ペアや小グループでの活動により、異なる考え方を相互に取り入れ深めていくという視点を重視します。その際、全ての児童・生徒がコミュニケーションの主体となるよう配慮する必要があります。

ウ 実践事例

事例15 コミュニケーション能力の基礎を育む ― 小学校第5学年国語「話すこと・聞くこと」の指導 ―

事例16 異なる意見をもつ者同士の対話 ― 中学校第1学年国語「話すこと・聞くこと」の指導 ―

(3) 感性・情緒

感性・情緒は主に、他者との人間関係の中で育まれるものであり、美しい言葉や心のこもった言葉の交流は、人間関係を豊かなものにします。また、物語や小説などの文学作品を読む、体験から感じ取ったことを自らの言葉で表現することも、児童・生徒の感性や情緒を育てます。

ア 課題

核家族化や少子化による家庭内での対話の不足、ゲームに代表される一人遊びの増加、地域社会におけるふれあいの減少などにより、言葉の交流が不足しています。また、インターネット、メール等の情報化の進展に伴い、児童・生徒の読書離れが広がっています。そうした中、「うざい」「きもい」「やばい」など、物事を直感的に捉え、感情を直接的に表現する言葉が多用されています。

イ 解決の方向性

感性・情緒を育てるに当たり、論理と併せて捉えることが重要です。物事を直感的に捉えるだけでなく、分析的に捉えることも感性や情緒を豊かにすることにつながるからです。例えば、音楽や絵画の説明や分析などの活動は、感性・情緒を豊かにする上で有効です。また、物語や小説などの文学作品を読むときに、その内容や表現について分析し、議論することなどの活動も感性・情緒を育てます。

特に、語彙を豊かにすることは、思考力を高めたり感性・情緒を豊かにしたりすることにつながります。従来に増して、児童・生徒の読書活動を充実させることが大切です。

事例17 全校で取り組む俳句の創作活動 ― 五・七・五に思いを込める楽しさを実感 ―

事例18 小学校低学年における書評会 ― 読書意欲とプレゼンテーション能力の向上 ―

(4) 教師の力

教師に必要な主な能力には、「学習指導力」、「生活指導力・進路指導力」、「外部との連携・折衝力」、「学校運営力・組織貢献力」の四つがあります。いずれも「言葉の力」が基盤となります。

ア 課題

「学習指導力」と「生活指導力・進路指導力」は、これまでも校内研修等を通して育成されてきました。「外部との連携・折衝力」と「学校運営力・組織貢献力」は、新たな学校の在り方、今日的な課題への対応として求められるもので、今まで十分に取扱いわれてきませんでした。

現在、各学校には社会状況や児童・生徒の変化等を背景として、地域とのより強い連携体制の構築や組織的な運営が必要になっています。こうした背景を踏まえ、「外部との連携・折衝力」と「学校運営力・組織貢献力」を教師に必須の力として育成していく必要があります。

イ 解決の方向性

「外部との連携・折衝力」と「学校運営力・組織貢献力」を実際の職務遂行上での言語活動として捉えると、「聞くこと」、「話すこと」、「書くこと」の三つになります。

「聞くこと」については、「相手の話の要旨を的確に把握して、その内容を理解する力」、「話し手の気持ちや主張だけでなく、言外の思いや真意を感じ取る」等です。「話すこと」については、「自分の考えを明確にして、説得力をもって論理的に伝える」、「相手や場面・目的に応じて、伝えるべき内容を分かりやすく話す」等です。「書くこと」では、「読み手が理解しやすい論理的文章を書く」、「会議や研修会などで、分かりやすく説明するための資料を作成する」等です。

こうした職務遂行上必要な力を、参加者を能動的な立場に置く「考えさせる」形態（討議法など）や「体験させる」形態（ロールプレイなど）を用いた研修や日々のOJTを通して育成します。

ウ 実践事例

事例19 校務改善の企画・提案 ― 企画書の作成を通じた経営参画 ―

事例20 保護者等への対応力を高める ― ロールプレイを取り入れた演習 ―

クリティカル・シンキングを取り入れた授業づくり

事例 13

— 小学校第2学年国語「書くこと」の指導 —

「言葉の力」で

児童・生徒の学力を

高める

ねらい

書いた文章を友達と読み合い、互いに感想を伝え合ったり助言し合ったりすることにより、多様な視点から文章の間違いなどを正したり、よりよい表現を工夫したりする。

主な取組及び「言葉の力」

	取 組	「言葉の力」
1	<課題設定や取材> ○ 経験したことから題材を決め、必要な事柄を集める。	【考える】◆ 一年間を振り返り、一番楽しかったことを思い出す。 【表 す】◆ 書くために必要な事柄をカードにメモをとる。
2	<構成> ○ 自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考える。	【考える】◆ 出来事や行動、情報などの順序に沿って、文章全体を内容のまとまりごとに分けて配置する。 ◆ 自分の考えが明確になるような文章を構成する。
3	<記述> ○ 語と語や文と文との続き方に注意しながら、つながりのある文章を書く。	【表 す】◆ 事柄の順序に沿って語と語、文と文との続き方を考えて記述する。
4	<推敲・交流> ○ 自分が書いた文章を音読し、間違いなどに気づき、正す。 ○ 互いに書いた文章を読み合い、感想を伝え合った後に、自分の文章を振り返る。	【考える】◆ 主語・述語のつながりや句読点の打ち方、助詞の正しい表現に加え、1年生に分かりやすい文章になっているか確認する。 【感じる】◆ 相手の気持ちや作品の内容・表現を感じ取る。 【想像する】◆ 1年生が読んでどのような感想をもつか予想する。 【表 す】◆ 友達の文章を読んで感想を話す。 ◆ 友達の感想を基に、自分の文章を書き直す。

組織的な対応に向けて

校 長

- 各教科におけるクリティカル・シンキングを取り入れた授業の実施を指示（学校経営計画）
- 授業観察に基づく指導・助言

副校長

- 授業改善推進プランに関する指導・助言
- 学習指導案の作成に係る指導・助言
- 授業観察に基づく指導・助言

分掌のリーダー （主幹教諭等）

- 校内研修の企画・運営
- 学習指導案の作成に係る指導・助言
- 授業改善推進プランの更新

教 諭

- 学習指導案の作成及び授業の実施
- 研究協議会への参画
- 授業改善推進プランの更新

具体の活動場面 【取組 4】

【単元名】 「1年生に2年生での楽しかったことを伝えよう」

【単元で身に付けさせる力】

- 経験したことについて、簡単な構成を考えて文章を書く。
- 交流を通して友達の意見を基にしながら自分の文章を振り返る。

【指導上の留意点】

- 相手意識及び目的意識を明確にすることで、書く意欲を高める。
- 相手意識及び目的意識をもたせることで、交流の目的を明確にする。

取組 4 推敲・交流

- 自分で書いた文章を音読し、次の事柄を確かめる。
 - ・ 事柄の順序
 - ・ 主語と述語との関係
 - ・ 字の間違い
 - ・ 助詞の使い方
 - ・ 丸、点、かぎ（「」）の使い方
- 書いた文章を互いに読み合い、1年生に伝わる表記や内容になっているか、感想を伝え合う。

友達の書いた文章が1年生にきちんと伝わるように、「他に考え方はないか」「筋が通って、分かりやすいか」「本当にこれでよいか」と考えながら読み、友達に感想を伝えましょう。



- ただ「うれしかった」ではなくて、何がうれしかったか書き加えたら、もっとよくなるよ。
- この書き方では、1年生には分からないよ。もっと…
- 楽しかったことがよく伝わると思うよ。



【自分の考えの再構築】

- 交流を通して出た意見や感想を基に、自分の文章を振り返る。
- 1年生に2年生での楽しかったことが伝わるように書き直す。



- ・ 「え」ではなく、「へ」だ。
- ・ 会話文は、「」を付けないといけ
ない。
- ・ 文と文のつながりがおかしいかな。
- ・ 自分の考えが1年生に伝わるように
書けているかな。

【クリティカル・シンキングを促す 指導の手だて】

（１）多面的・多角的な視点

「他に考え方はないか」

- 友達の感想を基に、自分の文章を書き直させる。

（2）論理的思考

「筋が通って、分かりやすいか」

- 時間や事柄の順序などを捉えて、文章の構成を確認させる。

(3) メタ認知

「本当にこれでよいか」

- 1年生に伝わる内容か、表記の間
違いはないか、確認させる。

◆ 取組の成果

(1) 教師について

- 従来に増して、推敲に関する指導を丁寧に行うようになった。

（２）児童について

- 課題設定から交流に至る各段階において、児童自身が「他に考え方はないか」「筋が通って、分かりやすいか」「本当にこれでよいか」、という視点から文章を読み返す習慣が形成されつつある。

考察

低学年の児童に、クリティカル・シンキングを働かせることは難しいのではないか。

この疑問を解消することをねらって、昨年度、本委員会では提言をまとめた。クリティカル・シンキングの主な要素を「多面的・多角的な視点」、「論理的思考」、「メタ認知」と捉えた上で、これらを児童の内言に置き換え、クリティカル・シンキングを取り入れた授業づくりのポイントを明らかにしたのである。すなわち、「他に考え方はないか」、「筋が通って、分かりやすいか」、「本当にこれでよいか」という、児童の内言を促す指導を工夫することが、授業づくりのポイントである、とした。

本事例では、まず、児童が書いた文章を自ら読み返す段階で、この三つの内言を発するよう指導した。その上で、交流の段階でも友達からの感想や意見を基に、再度内言を発しながら自分の文章を推敲させた。

なお、小学校国語の「書くこと」に関する主な論理的思考は、低学年では事柄の順序、中学年では段落相互の関係、高学年は文章全体の構成の効果について働かせる。

クリティカル・シンキングを取り入れた授業づくり

事例 14

— 中学校第1学年数学 習熟度別指導 —

「言葉の力」で

児童・生徒の学力を

高める

ねらい

習熟度別指導において、指導の手だてを工夫することにより、課題を多面的・多角的な視点から捉え、主体的に解決する力を高める。

主な取組及び「言葉の力」

	取 組	「言葉の力」
1	<課題の把握> ○ 同一の教材から、習熟の程度に応じた課題を提示し、課題を把握させる。	【感じる】◆ 学ぶことの意義や有用性を実感する。 【想像する】◆ 課題解決に向けて見通しを立てる。
2	<自己の考えの形成> ○ 多面的・多角的な視点に立って構築した自らの考えを数学的に表現する。	【考える】◆ 事象を数理的に考察する。 【表 す】◆ 数理的に処理して課題を解決する。
3	<考えの交流> ○ 互いの考えを伝え合うことで一人では気付かなかった新たな考えを見いだす。	【感じる】◆ 相手の考えに共感したり、批判しりする。 【表 す】◆ 根拠を明らかにし筋道立てて説明する。
4	<自己の考えの再構築> ○ 交流で得られた相手の考え等から、改めて自分の考えを構築する。	【考える】◆ 交流を基に、自分の考えを再構築する。
5	<課題の解決> ○ どのような既習事項を活用すると課題を解決できるか、複数の中から最も課題解決に適しているものはどれかについて考えさせる。	【感じる】◆ 数学の必要性や有用性について理解する。 【表 す】◆ 数理的に処理し、課題を解決する。

組織的な対応に向けて

校 長

- 各教科におけるクリティカル・シンキングを取り入れた授業の実施を指示（学校経営計画）
- 授業観察に基づく指導・助言

副校長

- 授業改善推進プランに関する指導・助言
- 学習指導案の作成に係る指導・助言
- 授業観察に基づく指導・助言

分掌のリーダー （主幹教諭等）

- 校内研修の企画・運営
- 学習指導案の作成に係る指導・助言
- 授業改善推進プランの更新

教 諭

- 学習指導案の作成及び授業の実施
- 研究協議会への参画
- 授業改善推進プランの更新

具体の活動場面 【取組 1 ～ 4】

【単元名】 資料の活用

【単元で身に付けさせたい力】

- 目的に応じて資料を収集したり、コンピュータを用いたりするなどして表やグラフに整理する。
- 代表値や資料の散らばりに着目してその資料の傾向を読み取る。

【本時で身に付けさせたい力】

- 資料の傾向を捉え説明することを通して、資料の傾向を読み取る。
- 資料の特徴や代表値を用いる目的を明らかにし、どのような代表値を用いるべきか判断する。
- 目的に応じて資料の収集を行う。(本事例「自己の考えの再構築」後)

取組1 課題の把握

(例) 基礎・基本コース

(例) 発展コース

夏の高校野球甲子園大会の決勝戦
〇・二・三投手と対戦

投手の記録	最高球速 (km/時)	最低球速 (km/時)	球速の平均 (km/時)	総投球数 (球)
〇・二・三投手	147	105	131	628

球速は、投げた球の速さを表しています。

平成 23 年度全国学力・学習状況調査

発問：何 km/時にしぼって練習すれば、〇・二・三投手からヒットが打てるようになると考えられますか。資料から読み取れる範囲で考えます。四つのうちから一つ選び、その理由を説明しなさい。

選択肢

① 118km/時 ② 131km/時
③ 139km/時 ④ その他

平均と最低の真ん中
平均と最高の真ん中

発問：この表から読み取れる情報で、度数分布多角形は、どのような形になると考えられますか。なぜ、そのような形になるのか説明しなさい。

生徒がかいた度数分布多角形

- (a) 凹形
 - (b) 最頻値が中央値より右側の凸形
 - (c) 最頻値が中央値より左側の凸形
 - (d) 最頻値が中央値に等しい凸形
- ※ 記載上、言葉で表した

取組2 自己の考えの形成

「平均が一番多いから②だよ。」

「(d) のようにはならないはずだよ。」

取組3 考えの交流

「平均が一番多いとは限らないよ。」

「(a) に賛成だけど、最低と最高が一番多いのはおかしい。」

「平均は中央の値より右側にあるよ。」

「(c) はおかしい。平均値は中央値より右側にある。」

取組4 自己の考えの再構築

考えの再構築

- 平均値と最頻値は同じではないから、②とはいえないか。すると④の可能性もあるな。
- 平均値と中央値の関係から、右側に多く集まっているかもしれないな。

考えの再構築

- 平均値と中央値の位置関係から、ある程度予測可能だ。
- そうか、平均だからといって、その部分が最頻値になるとは限らないから、(a) も考えられる。

クリティカル・シンキング
を促す主な指導の手だて

【多面的・多角的な視点】

- ◆ 課題解決に向け、互いの考えを生かし合う。
- ◆ 与えられた情報から既習事項の内容と関連付けて読み取り、解釈・推論し、相手に説明する。
- ◆ 相手の意見から他の考え方を知り、自分の考えの質を高める。

◆ 取組の成果

(1) 教師について

- 習熟の程度に応じた課題を設定し、学習過程を見通して指導に当たることが極めて重要であるという意識をより強くもつことができた。

(2) 生徒について

- 生徒の学習状況に合った課題提示及び習熟の程度に応じた丁寧な指導により、自分の考えをより明確にもてるようになり、その後の考えの交流、自己の考えの再構築の過程がより充実した。

考 察

現在、多くの中学校で、習熟度別指導が行われている。しかしながら、学習集団ごとに指導計画を作成し、習熟の程度に応じた自力解決の場面、集団で解決する場面を設定して指導を行っている学校は少ない。

本事例では、生徒が教材から読み取ったことを基に、多面的・多角的な視点に立って構築した自らの考えを数学的な表現を用いて交流し、高め合うことに重点をおいた。考えたことを数学的な表現を用いて伝え合う機会を設け、数学的に表現することのよさを実感できるようにした。その際、教材から必要な情報を取り出す、比較・関連付けて読み取る、読み取ったことを基に自分の考えを形成する、互いの考えを交流する、交流から学んだことを基に自分の考えを再構築するといった各学習過程を習熟の程度に応じて丁寧に指導した。

なお、生徒が考えを交流するに当たっては、第1学年では、表現の形式などにとらわれることなく、自分なりに説明し伝え合うこと、第2・3学年では、根拠を明らかにして相手に理解しやすくなるように筋道立てて説明し伝え合うことが重要である。

コミュニケーション能力の基礎を育む

事例 15

－ 小学校第5学年国語 「話すこと・聞くこと」の指導 －

「言葉の力」で

児童・生徒の人間関係形成能力を

高める

ねらい

体験的な学習活動を通して、コミュニケーションに必要な態度に児童自ら気付かせるとともに、聞き取った内容に触れながら話す能力を育てる。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	<全体計画の作成> ○ 「話し言葉によるコミュニケーション教育の全体計画」を作成する。	【考える】 ◆ 学校として取り組む話し言葉によるコミュニケーション教育の課題及び内容等を明らかにする。
2	<対話の学習の推進①「絵描きゲーム」> ○ 「絵描きゲーム」を行わせ、情報を言葉によって正しく伝達する難しさと必要な態度に気付かせる。 <対話の学習の推進②「リレーミーティング」> ○ 「リレーミーティング」を行わせ、聞いたことに触れながら話す能力を育てる。	【考える】 ◆ 情報を正確に伝えるためには、どのように話したらよいか、工夫する。 【感じる】 ◆ 相手の気持ちを感じ取る。 【想像する】 ◆ 表情や態度から、言外の思いを察する。 【表 す】 ◆ 情報を相手に分かりやすく伝える。
3	<対話の実践> ○ 各教科等において、異なる考え方をもちつて同士で対話の学習活動を行わせる。	【考える】 ◆ 相手に伝えたいことを的確に捉える。 【感じる】 ◆ 相手の気持ちを感じ取る。 【想像する】 ◆ 表情や態度から、言外の思いを察する。 【表 す】 ◆ 相手の話を的確に聞き取ってその考え方を尊重しつつも、自分の考えを適切に表現する。

組織的な対応に向けて

校 長	副校長	分掌のリーダー (主幹教諭等)	教 諭
○ 「話し言葉によるコミュニケーション教育の全体計画」の作成指示及び指導 ○ 授業観察に基づく指導・助言	○ 「話し言葉によるコミュニケーション教育の全体計画」の作成指導 ○ 「絵描きゲーム、リレーミーティング」の実施に係る研究主任への指導 ○ 授業観察に基づく指導・助言	○ 年間指導計画の見直し、各学年における対話の学習の位置付け ○ 対話に係る研修の企画・運営 ○ 学習指導案作成に係る指導・助言 ○ 次年度計画の立案	○ 学習指導案の作成及び授業の実施 ○ 取組の評価・改善

具体の活動場面 【取組 2】

取組 2 対話の学習の推進①「絵描きゲーム」

ねらい 情報を伝達する難しさと必要な態度に気付かせる。

- 概要**
- ◆ 二人一組の対話形式で、送り手から受け手へ元情報を伝達させる。
 - ◆ 送り手は手元に置いた図形を見ながら、受け手が原形に忠実に作図できるように描き方を口頭で説明する。
 - ◆ 伝達が終了した組は、元情報と作図した用紙を交換し合い、正確に情報を伝えるために必要な話し手と聞き手の態度について意見交換を行う。

※ 「絵描きゲーム」「リレーミーティング」の教材シートは、多摩教育事務所ホームページに掲載中です。

<http://www.tamajimu.metro.tokyo.jp/>

まず、この絵は三つのパーツからできています。一番上に、「にっこりマーク」を描いて…

「にっこりマーク」って、どんなマークだろう……。



取組 2 対話の学習の推進②「リレーミーティング」

ねらい グループで話をリレーさせることや、聞き取った内容に触れながら話す能力を育てる。

- 概要**
- ◆ 一年を振り返って印象に残ったことを漢字一字で表し、画用紙に書かせる。
 - ◆ 3・4名のグループごとに、自分の書いた漢字を見せながら、なぜその漢字で表したのかを説明させる。
 - ◆ 二人目は、一人目の話に触れながら話す。
 - ◆ 三人目は、二人目の話に触れながら話す。

「リレーミーティング」における実際の対話例

A (一人目) ……**白**

僕が今年一番印象に残ったことは、習い事の卓球です。5年生から始めたのですが、夏に初めて試合に出ました。試合球が白球に変わったので、「白」という漢字を選びました。

B (二人目) ……**金**

私もAさんと同じで、習い事が印象に残っています。私は体操を習っていますが、2020年には東京オリンピックも決まったので、オリンピックに出て金メダルをとりたいです。だから、「金」という漢字にしました。

C (三人目) ……**友**

私はAさんやBさんと違って特に習い事をしていませんが、5年生になって一番うれしかったことはクラス替えがあり、友達が増えたことです。だから「友」という漢字を書きました。

◆ 取組の成果

(1) 教師について

- 学校全体で、話し言葉によるコミュニケーション教育に重点をおいて指導することで、「教師は児童にとって最も身近な手本である」という認識から、各教師は従来に比べてより丁寧な話し方や聞き方を心掛けるようになった。

(2) 児童について

- 「絵描きゲーム」の学習活動を通して、児童は情報を伝達する難しさと必要な態度に自ら気付いた。また、日常の教科等で話し合う際に、それらの態度を意識させることで、事柄がより明確に伝わるよう、構成を工夫しながら話すことができるようになりつつある。

考 察

多摩地区のある中学校第1学年 170 名対象の調査によれば、「相手の話を最後まで聞かずに、自分の考えを話すことがある」と回答した生徒は 52%、互いが一方的に話をしている対話の録音教材を聞き、問題点を指摘できた生徒は 21%であった。生徒の多くが、自分の思いを一方的に伝えていることを示すデータである。こうした実態の改善には、小学校段階からの学習の積み重ねが必要である。

国際化や情報化の進展、価値観の多様化に伴い、話し言葉によって意思を伝え合い、相互理解を図ることの重要性は増す一方である。本事例では、「絵描きゲーム」を通してコミュニケーションに必要な態度に児童自ら気付かせたのちに、グループごとに聞いたことに触れながら話をリレーさせる「リレーミーティング」を行わせることにより、聞き手の理解を重視しながら話のやりとりを行う能力を育んだ。

本事例については、各学校のコミュニケーション教育の全体計画（多摩教育事務所のホームページに様式を掲載中）の一環として位置付け、各教科等の対話形式の学習活動につなげるとよい。

異なる意見をもつ者同士の対話

事例 16

— 中学校第1学年国語 「話すこと・聞くこと」の指導 —

「言葉の力」で

児童・生徒の人間関係形成能力を

高める

ねらい

対話の学習活動を通して、ものの見方や考え方が異なる相手と話し合うことの大切さを実感させる。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	＜コミュニケーションに必要な態度＞ ○ 「絵描きゲーム」及び「リレーミーティング」（事例15）を通して学んだ、コミュニケーションに必要な態度について確認する。 ＜自己の考えの形成 ①＞ ○ 論題「優先席は必要か必要でないか」に対して、自分の意見とその根拠をノートに記す。	【考える】◆ より正確なコミュニケーションを交わすために必要な話し手と聞き手の態度について考える。 【表 す】◆ 論題に対する自分の意見とその根拠をノートに箇条書きする。
2	＜自己の考えの形成 ②＞ ○ 同じ意見をもつ者同士3名又は4名のグループでリレーミーティングを行うことで、話す内容を充実させ、主張の中心点を明確にする。 ○ 異なる意見をもつ相手からの反論と応答、相手に対する反論項目と予想される応答について予想し、ノートに整理させる。	【表 す】◆ 論題について、根拠を明確にしながら自分の意見を述べる。 【感じる】◆ 相手の気持ちを感受する。 【想像する】◆ 考えの異なる相手からの質問や反対意見を予想する。
3	＜考えの交流（対話）＞ ○ 考えの異なる相手と対話を行う。 ・ 互いの主張及び立証 ・ 意見のやりとり ・ 結論 ＜自己の考えの再構築＞ ○ 対話を振り返り、再度、論題に対する自分の考えを見直し、ノートの記述に朱書きで加除訂正させる。	【考える】◆ 相手に伝えたいことは何かを的確に捉える。 【感じる】◆ 相手の表情や態度から、言外の思いを察する。 【表 す】◆ 自分の考えを筋道立てて相手に話す。 ◆ 対話を基に、自分の考えを修正する。

組織的な対応に向けて

校 長

- 「話し言葉によるコミュニケーション教育の全体計画」の作成指示及び指導
- 授業観察に基づく指導・助言

副校長

- 「話し言葉によるコミュニケーション教育の全体計画」の作成指導
- 分掌のリーダーとの連絡調整及び進行管理
- 学習指導案作成に係る指導・助言
- 授業観察に基づく指導・助言

分掌のリーダー （主幹教諭等）

- 年間指導計画の見直し、各学年における対話の学習の位置付け
- 対話に係る校内研修の企画・運営
- 学習指導案作成に係る指導・助言
- 次年度計画の立案

教 諭

- 学習指導案の作成及び授業の実施
- 取組の評価・改善

具体の活動場面 【取組 2、3】

- コミュニケーション教育の全体計画（多摩教育事務所のホームページに様式を掲載中）に基づき、小学校第5学年で、「絵描きゲーム」を通してコミュニケーションに必要な態度について自ら気付かせた。また、「リレーミーティング」を通して、聞いた内容に触れながら話す能力を育んだ。

（詳細については「事例 15」を参照のこと。）

- 論題については、事実認識に基づき自分なりの考えをもてる内容とした。
なお、論題の選定に当たっては、生徒が知的好奇心をもてる、探究しがいがある、複数の見方ができて意見が分かれるものを設定するとよい。（例 「大切な気持ちを伝えるなら、メールか手紙か」 など）

取組 2 自己の考えの形成

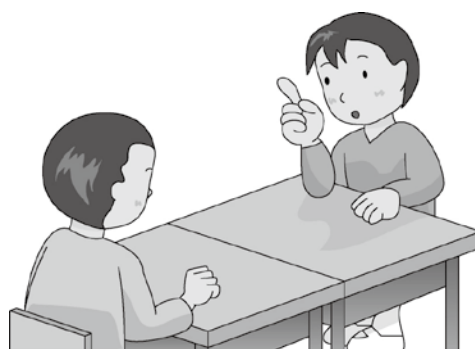
- 相反する意見や否定的な反応を想定して、論題を多面的に検討させた。
- 反対の立場から論題について考察を深めることは、1年生にはやや難しい活動である。そこで、同じ意見をもつ者同士で「リレーミーティング」を行わせ、互いの考えを補充させた。
- 対話のためのノートへのメモ書きは、要点のみをキーワードで記入させた。
文章にすると、「話し合い」ではなく、「読み合い」になることが想定されたからである。

取組 3 考えの交流（対話）、自己の考えの再構築

- 対話のねらいは、次のように設定した。

相手を論破することではなく、相互に啓発し、
論題に対する考えを深め合うこと。

- 対話中のメモ書きは、必要最小限にとどめさせた。
- 疑問点は自分の解釈を示しながらその場で問いたださせた。
- 互いの意見の共通点や相違点を整理しながら討論させた。



◆ 取組の成果

（1）教師について

- 異なる意見をもつ者同士の対話から、ディベートを想定する教師が多くいた。勝敗を決するのではなく、論題について多面的・多角的な思考を促し、互いの考えを深め合うことが重要であることを認識し、対話の学習活動を授業に取り入れる教師が増えた。

（2）生徒について

- 生徒は、相手の話を的確に聞き取って理解し、それを一旦は受け止めた。その上で、共感や疑問、批判など自分なりの反応について、根拠を明確にしながら伝えていった。

考 察

多摩地区のある中学校第1学年 170 名対象の調査によれば、異なる考えをもつ者同士の対話において、「異なる部分に触れられたくない」と回答した生徒は 22%、「早く話を終えるようにする」と答えた生徒は 21%であった。今日の生徒に、ものの見方や考え方が異なる相手との対話を避ける傾向があることをうかがわせるデータである。

2020 年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、世界の人々から信頼され、尊敬される日本人を育成するためにも、自分とは異なる考え方をもち他者の意見に耳を傾け、その考え方を尊重しつつ、自分の意見を確かな根拠を基に適切に表現する言葉の力を育む必要がある。本事例では、対話の学習において、「話題との出会い」、「自己の考えの形成」、「考えの交流（話し合い）」、「自己の考えの再構築」の各段階を丁寧に指導したことが、生徒に異なる意見をもつ相手から学ぶことの大切さを実感させることにつながった。

なお、対話の話題としては、児童・生徒が知的好奇心をもち、探究のしがいのあるものを設定することが大切である。

全校で取り組む俳句の創作活動

事例 17

— 五・七・五に思いを込める楽しさを実感 —

「言葉の力」で

児童・生徒の感性・情緒を

高める

ねらい

身の回りの物事や体験、心の動きなどを捉えて俳句をつくることで、ものの見方や感性・情緒を豊かにする。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	<共通の課題意識をもつ> ○ 教師による俳句の紹介を聞き、自分の感じたことや感動したことについて俳句をつくる学習の見通しをもつ。	【想像する】 ◆ 俳句の紹介から情景を思い浮かべる。
2	<俳句の鑑賞及び暗唱> ○ 俳句の十七音から、季節や風情、句に込めた思いなどを思い浮かべたり、七音五音を中心としたリズムから国語の美しい響きを感じ取りながら暗唱したりする。	【感じる】 ◆ 俳句の内容・表現、自然や人間に関する事実を感じ取ったり、感動したりする。 ◆ 言葉の微妙な意味の違いや美しさなどを感受する。
3	<俳句の創作・句会の実施> ○ 自分の感じたことや感動したことについて、言葉を吟味しながら俳句をつくり、どんなことを詠んだ句なのかを説明する。	【感じる】 ◆ 自然や人間に関する事実を感じ取ったり、感動したりする。 【考える】 ◆ 感動したことについて、言葉を吟味する。 【表す】 ◆ 感動したことについて、言葉を吟味して表現する。

組織的な対応に向けて

校 長

- 俳句の魅力に関する全校朝会での講話及び学校だよりによる発信
- 授業観察に基づく指導・助言
- 優秀作品の選定及び表彰

副校長

- 分掌リーダーとの連絡調整及び進行管理
- 授業観察に基づく指導・助言
- 優秀作品の選定

分掌のリーダー (主幹教諭等)

- 年間指導計画に俳句に関する学習指導を設定
- 「全校俳句大会」の実施計画の立案
- 次年度計画の立案

教 諭

- 学習指導案の作成及び授業の実施
- 俳句掲示等、学校環境の整備
- 取組の評価・改善

具体の活動場面 【取組 2、3】

取組 2 俳句の鑑賞及び暗唱

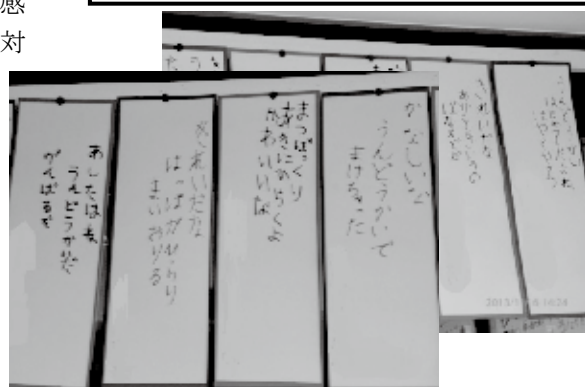
- 教師が提示した俳句について児童・生徒が、季節や風情、句に込めた思いなどを思い浮かべたり、七音五音を中心としたリズムから国語の美しい響きを感じ取りながら音読したり暗唱したりするようにした。その上で、気に入った俳句を選ぶ活動を行わせた。
- 教科書に掲載された作品に加え、地域にゆかりのある歌人や俳人、地域の景色を詠んだ歌や句を選び、提示した。

取組 3 俳句の創作・句会の実施

- 「取組 2」と並行して、日頃、心を動かされたことなどを短い言葉でノートに書き留めるよう指示し、俳句の題材を集めさせた。
- 題材を見付けられない児童・生徒には、「思ったことや感じたことを表す言葉」などを記した語彙表を基に、教師と対話を行わせた。
- 学期に一回、各学級で句会を実施し、特選に選ばれた俳句を学期に一度行われる全校集会で発表させた。
- 発表に当たっては、俳句とその句に込めた思いについて説明させた。発表された句の中から、児童・生徒一人一人が気に入った俳句を選び、一番多く選ばれた俳句をその学期の特選とした。
- 各学級で選ばれた俳句は、校内に掲示した。

学級句会の実施

- 1 句を短冊に書いて出す。
- 2 短冊を清書する。
- 3 清書を集め、5句ずつ黒板に貼る。
- 4 「特選」を決定する。



◆ 取組の成果

(1) 教師について

- 俳句の題材を収集するために、日頃から季節や情景の変化を鋭敏に感じ取ったり、教材選定のために日常的に俳句を鑑賞したりするようになった。

(2) 児童・生徒について

- 教科書教材に加え、児童・生徒の感性を揺さぶるであろう俳句を提示し、音読したり暗唱したりすることで、繰り返しそのリズムや響きを体感できるようになった。
- 地域の俳句大会や企業が主催する俳句コンテスト等に応募する児童・生徒が増えた。また、回を重ねるごとに入賞する作品が増え、他の児童・生徒のよい模範となった。

考 察

児童・生徒は、俳句の五・七・五の十七音から、季節や風情、句に込めた思いなどを思い浮かべたり、七音五音を中心としたリズムから日本語の美しい響きを感じ取ったりして、感性・情緒を高めていく。俳句をはじめ、日本文化として大切にされ継承されてきた古典には、日本語の美しい表現やリズムがある。

本事例では、まず、暗唱を通して、児童・生徒が俳句のもつ美しい表現やリズムを身に付けるようにした。次に、児童・生徒が自分でも作ってみたいという気持ちをもつように指導し、実際に作った句を音読し合うことで、リズムを感じ取りながら情景を思い浮かべるようにした。

学級句会を開催したこと、校内にコーナーを設けて短冊に書いた全員の句を掲示したことが、児童・生徒の創作意欲を高めることにつながった。また、児童だけでなく、教師及び保護者の作った俳句も掲示することで、学校を挙げて俳句に親しむ雰囲気醸成することができた。

本事例を実践するに当たっては、教師が児童・生徒の感性・情緒に訴える俳句を数多く選定・提示し、児童・生徒が自ら進んで鑑賞し暗唱するよう工夫することが重要である。

小学校低学年における書評会

事例 18

— 読書意欲とプレゼンテーション能力の向上 —

「言葉の力」で 児童・生徒の感性・情緒を 高める

ねらい

本を紹介し合い、自分が一番読んでみたい本について発表し合うことで、読書に対する関心・意欲を高めるとともに、プレゼンテーション能力を育む。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	<学習の見通しをもつ> ○ 今までに読んだ好きな本を持ち寄り、題名と登場人物を中心に紹介し合う。 ○ 教師による本の紹介を聞き、「お気に入りの本を紹介する」という学習のめあてをもつ。	【想像する】◆ 教師による本の紹介を聞き、学習の見通しをもつ。
2	<好きな箇所を見付けながら読む> ○ 教材文で、登場人物、あらすじなどについて確かめる。 ○ 教材文の読み聞かせを聞き、好きな箇所を紹介し合う。 ○ 教材文を再読し、好きな箇所を紹介するカードを作る。	【想像する】◆ 場面の様子を人物の行動に着目して想像したり、本の内容に対する自分の思いや考えを膨らませたりする。 【表 す】◆ 好きな言葉にサイドラインを引いたり、好きな箇所とその理由を述べたりする。
3	<お気に入りの本を紹介する> ○ 自分のお気に入りの本を選び、紹介するためのカードを作る。 ○ カードを使って本の紹介をする。 ○ 友達の本の紹介を聞き、自分が一番読んでみたい本やお気に入りの本を選び、発表し合う。	【感じる】◆ 交流を通して、互いの感じ方を認め合ったり、自分の作品に対する思いを深めたりする。 【表 す】◆ 自分が一番読んでみたい本やお気に入りの本を選び、選んだ理由と共に発表する。

組織的な対応に向けて

校 長	副校長	分掌のリーダー (主幹教諭等)	教 諭
○ 全学年による「書評会」の実施を指示 ○ 授業観察に基づく指導・助言	○ 分掌リーダーとの連絡調整及び進行管理 ○ 学習指導案の作成に係る指導・助言 ○ 授業観察に基づく指導・助言	○ 各学年の年間指導計画に「書評会」を設定 ○ 「書評会」に係る研修計画の立案及び実施 ○ 「書評会」実施計画の立案 ○ 次年度計画の立案	○ 学習指導案の作成及び授業の実施 ○ 取組の評価・改善

校務改善の企画・提案

事例 19

— 企画書の作成を通じた経営参画 —

「言葉の力」で

教師の力を

高める

ねらい

校務改善の具体策を提示させることを通して、教師の企画力を育む。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	＜校務の課題把握＞ ○ 効率的・効果的に校務を遂行する上での課題を把握する。	【考える】◆ 校務全体を振り返り、学校経営計画の実現に向けた課題を見いだす。
2	＜「校務アイデアシート」の作成及び管理職への説明＞ ○ 考案した解決策を、現状及び課題、期待される効果と共に、「校務アイデアシート」に記述する。 ○ 「校務アイデアシート」の記載内容について、校長及び副校長に説明する。	【考える】◆ 解決策を考案する。 【想像する】◆ 解決策を講じた際の校務の改善状況を思い描く。 【表す】◆ 論理的な文章を書く。 ◆ 校長及び副校長に端的に説明する。

※「校務アイデアシート」の様式は、多摩教育事務所ホームページに掲載中です。<http://www.tamajimu.metro.tokyo.jp/>

組織的な対応に向けて

校 長	副校長	分掌のリーダー (主幹教諭等)	教 諭
○ 全教師への校務改善に係る提案を指示 ○ 「校務アイデアシート」の記述内容についての聞き取り ○ アイデアの実施に向けた指示	○ 校務の進捗状況の把握 ○ 「校務アイデアシート」の書き方に関する指導及び記載内容に係る聞き取り ○ アイデアの実施に向けた指導・助言	○ 「校務アイデアシート」の作成 ○ 「課題別カード」の作成及び更新 ○ 「課題別カード」を基にした、各取組の進捗状況の把握及び指導・助言 ○ 校長及び副校長への説明	○ 「校務アイデアシート」の作成 ○ 「課題別カード」の作成及び更新 ○ 校長及び副校長への説明

具体の活動場面 【取組 2】

副校長による「重点項目整理表」

項目名	経営計画との関連	分掌名	達成目標(評価規準)
言語活動の充実	校内研究の推進	研究推進	学期に20冊以上の読

「課題別カード」

項目名	言語活動の充実		
分掌名	研究推進	担当者名	〇〇 〇〇
達成目標	学期に20冊以上の本を読む。		
達成に向けた課題及び方策	・ 週3日、5分間の朝読書を実施 ・ 図書委員会による「1週間1冊」月間の実施		
月	計 画		
4	・ 年度初めの朝会における読書に関する講話の実施		
評価及び次年度への引き継ぎ ○ 6月は全児童が「1週間1冊」を達成、全児童が「学期に20冊」を達成			

＜ここまでの取組＞

- 〇 副校長が作成した「重点項目整理表」に基づき、担当する校務分掌に係る「課題別カード」を作成
- 〇 随時修正しながら、「課題別カード」に沿って校務を推進

校務アイデアシート

提案日 平成25年〇月〇日

提案者 〇〇 〇〇

タイトル

全校で実施する朝の10分間読書

1 現 状

児童が主体的に本を手取る姿が見られない現状がある。

2 課 題

思考力・判断力・表現力等の育成に、読書は欠かせない。読書の日常化を図ることにより、読む習慣を身に付けさせる必要がある。

3 解 決 策

- ・ (月)を除き、朝の10分間読書を全校一斉に実施する。
- ・ 教師も児童と一緒に本を読む。(学級事務等は行わない。)

4 期待される効果

- ・ 本を読むことが当たり前になり、学校に限らず家庭においても本を手にする機会が増えることが期待される。

取組 2「校務アイデアシート」の作成及び管理職への説明

- 〇 校務改善を要する事項について見だし、現状と課題、解決策と期待される効果を「校務改善シート」に記入した。
- 〇 作成に当たっては、関連する校務の担当教諭と情報交換を行い、組織的に推進するためのアイデアを盛り込んだ。
- 〇 作成したシートを基に、校務改善に向けたアイデアを校長及び副校長に説明した。
- 〇 校長及び副校長の指導を受け、企画書を修正した。

◆ 取組の成果

- 〇 学校経営計画の実現に向けて、企画・提案を行うことを通して、自ら学校経営に参画し、学校をよりよく変えていこうという意識がより一層高まった。
- 〇 学校経営計画の実現という目的に向けて、校務の在り方について、実効性及び効率性の二点から見直す意識が芽生えた。課題を自ら発見し、その解決に向けた方策について考案することに喜びを感じるようになった。

考 察

企画とは、組織が今よりもよくなるための課題を指摘し、その解決策を示すことである。一般的に企画というと、新規事業を想起しがちである。しかし、既存の事業の工夫・改善を継続して行うことが、組織の着実なレベルアップにつながる。

本事例では、教師に企画書を作成させ、その取組を学校を挙げて実施する体制づくりを行った。企画書には、現状、課題、解決策、期待される効果を記し、1枚にまとめることで、論旨がより明確になった。この企画書の作成を通して、教師に現状を分析する力、課題を発見する力、解決策や成果などを見通す力、論理的な思考力と表現力を育むことができた。

当初から自主的な企画を求めるのが困難な教師もいる。そこでまず、副校長が企画書のサンプルを作って教師に示す。続いて、課題を提示して企画書の作成を命じ、その取組状況を確認しながら、企画書の作成に関わる基本的な事項について指導する。この一連の指導を個々の教師を対象に行った上で、自主的な企画の立案を促していくとよいと考える。

保護者等への対応力を高める

事例 20

ー ロールプレイを取り入れた演習 ー

「言葉の力」で

教師の力を

高める

ねらい

ロールプレイを取り入れた演習を通して、保護者等からの要望に対応する力を育む。

主な取組及び「言葉の力」

取 組		「言葉の力」
1	＜準備＞ ○ 次の準備を行う。 - 事例の概要 - 役割の名札 3人組のグループ編成 (保護者役、教師役、オブザーバー役3人組) ○ 研修の流れの説明	【考える】 ◆ 保護者との対話における教師の役割を理解する。
2	＜ロールプレイ＞ ○ 10分間のロールプレイを行う。 ① 相手の意見や主張の根拠を確かめながら聞く。 ② 「～が心配なのです。」 「～と感じたのです。」 等、共感を伝える。 ③ 話の背景にある事情や心情を察する。	【考える】 ◆ 事実と推測、要望と難題を整理しながら聞く。 【感じる】 ◆ 保護者役の気持ちを受取る。 【想像する】 ◆ 訴えの背景にある事情を察する。 【表す】 ◆ 保護者とのやりとりを踏まえ、解決の方向性を提案する。
3	＜感想の交流＞ ○ グループ内で互いに感じたことを伝え合う。 - 保護者や地域住民の立場でどう感じたか。 - 教師の立場で困ったことは何か。 - 観察者からみて、学校の対応としてよかったことは何か 等	【表す】 ◆ 互いに気付いたことを伝え合う。

組織的な対応に向けて

校 長	副校長	分掌のリーダー (主幹教諭等)	教 諭
○ 教師の保護者対応に係る課題の把握 ○ ロールプレイを通じた、保護者対応に係る解決の方向性の明確化	○ 保護者対応の実態を踏まえた事例決定 ○ ロールプレイを通じた企画・運営に係る研究主任への指導・助言	○ 研修の事例検討 ○ グループ構成 ○ 研修日程の調整	○ 研修の実施 ○ 研修の評価 ○ 研修成果の活用

具体の活動場面 【取組2、3】

取組2 ロールプレイ

- 保護者対応においては、相手の真の思いを理解し切れず、対応に苦慮することが多い。感情的な保護者を目の前にして、真意を汲み取りつつ、解決に向けた話し合いを進めることは容易ではない。
- 保護者から無理難題を突き付けられた場面を想定し、教師役、保護者役を演じた上で、それぞれに感じたことを伝え合うことにより、日頃の保護者への対応を振り返り、よりよい対応の在り方を探ることを目的とした。

<事例>

- ・ A児は友達とふざけている最中、相手にけがをさせてしまった。
- ・ 担任はその日のうちに双方の保護者に連絡、経緯及び指導内容について説明した。
- ・ 翌日、A児の保護者から学校に苦情の電話が寄せられる。「友達がけがをしたのは事故であり、うちの子が一方的に悪いのではない。謝る必要はない。」という内容であった。
- ・ 保護者に来校してもらい、担任と話し合うことになった。



取組3 感想の交流

- 10分間のロールプレイの後、5分間で振り返りを行った。

<保護者役>

「うちの子だけが悪いのではない。」ということにとらわれ、「暴力は許されない。」という原則がどこかにいってしまった。なぜ分かってくれないのか、という思いが強くなった。

<教師役>

相手が逆上していると、こちらも冷静に受け止められなくなる。「それは違うだろう。」などと、心の中で思っていることがつい表情に出てしまい、事態をよけいにややこしくしてしまっているのではないか、と思った。

<観察者>

表情だけでなく、声の調子も大切であると感じた。教師が張り切りすぎると、保護者は話しづらい雰囲気になる。静かに、所々相づちを打ちながら聞く姿勢が大切だと分かった。

◆ 取組の成果

- 教師役、保護者役、それぞれを体験することにより、多角的に対応の在り方を学ぶことができた。
- 観察者として、やりとりを見聞きすることを通して、新たなヒントを得たり、自己の日頃の対応を振り返ったりすることができた。
- 観察者を設定することにより、日頃気付かない言葉の使い方や声の調子など、相手に与える印象を含めた総合的な課題に気付くことができた。

考 察

社会の急激な変化や価値観の多様化により、学校に対する意見等が多様化している。そうした中、保護者や地域住民からの要望や苦情など、日常的に起きる問題を適切に解決することは、今教師に求められている重要な力の一つである。

本事例では、具体の対応場面を設定し、役割演技を行うことを通して、要望や苦情の背景やより望ましい対応の在り方について考えを深めた。1グループは3名とし、全員が役割を交代することにより、異なる視点から対応の在り方について考察することができた。グループについては、経験年数や性別、職層などが異なる者で編成したことが、新しい発見につながった。

ロールプレイで大切なことは、事例の解決ではない。演じながら、互いに何を感じるかである。保護者や地域住民の立場でどう感じたか、話しやすかったか、教師の立場で困ったことは何かなど、感想の交流を重視したいと考える。

なお、教師役は受容・傾聴・共感を基本とし、事実と推測、要望と無理難題を整理し、分けて考えることが必要である。

ま と め

本委員会では、実践研究の分析・考察を通して、「言葉の力」を中核とした学校づくりのポイントを明らかにしました。

学校づくりのポイント

「言葉の力」を中核とした学校づくりのポイントは、全ての教師が「言葉の力」について共通の認識をもち、コミュニケーションをより活性化しながら経営計画を編成・実施し、その結果を評価して更なる改善へとつなげていくことにあります。経営計画の実現に向け、教師が互いの考えを言葉によって伝え合う営みを積み重ね、より一層連携協力していくことが大切です。

なお、ここでいう経営とは、学校経営はもとより、それに基づく各分掌の経営も含みます。



1 「言葉の力」の共通認識

一つ一つの言葉は、極めて曖昧で頼りないものです。私たちが言葉によって現実をありのままに表現することには、限界があります。しかしながら、言葉は、私たちに「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」を与えてくれます。言葉の担い手である私たちが、「考える」「感じる」「想像する」「表す」という四つの行為を、相手や目的、場の状況に応じて丁寧に繰り返すことで、言葉は力を発揮します。言葉の限界性を自覚し、補完する努力を惜しまない人こそが、真の「言葉の力」を得ると言えます。

こうしたことを踏まえ、「言葉の力」を中核とした学校づくりを行うに当たっては、人はそれぞれ、ものの見方・考え方が異なることを踏まえつつ、コミュニケーションを一層活性化して、言葉の不完全さを補うことが必要です。そのため本研究では、副校長の「重点項目整理表」及び各分掌の「課題別カード」を活用しながら、丁寧にコミュニケーションを積み重ね、校長が描く目標達成に向けて、各教師の意思を統合する事例を紹介しました。また、児童・生徒への学習指導では、物事を言葉によって正確に伝えることの難しさと、コミュニケーションに必要な態度に児童・生徒に自ら気付かせたあと、異なる考えをもつ者同士の対話を行わせる指導事例を掲載しました。

【関連する事例】

事例3 P13・14

事例1 P9・10

2

言葉の機能を生かした
経営計画の編成・実施及び評価・改善

言葉は、「知的活動」、「感性・情緒」、「コミュニケーション能力」のそれぞれ基盤を成します。経営を進めるに当たり、学力向上はもとより、健全育成、組織力向上、人材育成、家庭・地域との連携など、幅広い領域が対象となります。

経営計画を編成する際には、国語科はもとより、学校の教育活動全体の中で、適切かつ効果的な言葉の教育が行われるようにすることが重要です。そのため、言葉の教育を学校づくりの中心に据え、全教育課程を編成します。

経営計画の実施に当たっては、組織の成員の意識を目標へと統合すること及び成員間のコミュニケーションを積み重ねることで、組織の活性化を図ります。併せて学校生活全体における言語環境を整備すること、具体的には、教師が正しく豊かな言葉で話したり書いたりすること、掲示物や配布物において用語を適切に使うこと、集団の中で安心して話ができるような教師と児童・生徒、児童・生徒相互の望ましい人間関係を築くことなどがが必要です。

学校評価については、学校経営計画との連動を図り、自己評価及び学校関係者評価をより一層充実させ、学校として一貫した評価・改善を行うことで、効果的・効率的な学校づくりを実現させることが肝要です。

事例4 P15・16

事例5 P17・18

事例6 P19・20

事例10 P29・30

事例12 P33・34

事例2 P11・12

事例11 P31・32

3

教師及び子供の「言葉の力」の育成・活用

今日、教師には、多様化・複雑化する教育課題や保護者からの要望等に対応するため、相手や目的に応じたコミュニケーション能力が必要になっています。若手教師が激増する中、具体の場面を想定したロールプレイを行うなど、参加体験型の校内研修を実施することが有効です。また、学校の教育力を高め、組織的な課題解決を図るため、企画力や会議での発言力を高めることも重要です。本研究では、「校務アイデアシート」を活用した企画提案を紹介しました。他にも例えば、会議資料は提案者が必ず前日までに配布し、参加者は目を通して疑問や意見を資料に書き込んでおくなど、学校としての仕組みづくりを行うことが必要です。

児童・生徒に育む「言葉の力」については、学力向上と健全育成の両面から捉え、家庭・地域と連携しながら、学校の全教育活動を通して計画的・系統的に育成することが必要です。学力向上では、各教科等に固有の思考力・判断力・表現力等を、国語科で培った「言葉の力」を活用しながら高めていきます。健全育成では、人間関係形成能力の向上に向け、対話の力を高めます。指導に当

事例9 P27・28

事例20 P51・52

事例19 P49・50

事例17 P45・46

事例15 P41・42

たっては、体験的な学習を通してコミュニケーションに必要な態度に児童・生徒自らに気付かせたのちに、ものの見方や考え方が異なる相手との対話の学習活動を行わせます。その際、「話題との出会い」、「自己の考えの形成」、「考えの交流」、「自己の考えの再構築」という話合いの四つの学習過程を丁寧に指導することが肝要です。

教師及び児童・生徒の「言葉の力」を高めるに当たり、共通して重視すべきことが三つあります。

第一は、クリティカル・シンキングの促進です。多面的・多角的な視点を持ち、論理的思考とメタ認知を働かせながら、「他に考え方はないか」、「筋が通って、分かりやすいか」、「本当にこれでよいか」と、自らに問い続けることです。

第二は、読書習慣の確立です。読書は、言葉の力を形成している「考える力」、「感じる力」、「想像する力」、「表す力」のいずれにも関わり、これらの力を育てる上で中核となっています。語彙を豊かにし、全ての活動の基盤となる「教養・価値観・感性等」を身に付けるためにも極めて重要です。「朝の10分間読書」をはじめ、一斉読書を学校教育の中に設定し、教師と児童・生徒が共に本に親しむようにしたいものです。また、国語の授業で、日常の読書を促進する取組、例えば、小学校段階から継続して「書評会」を実施することも必要です。

第三は、日常の話し言葉の改善・充実です。話し手の考えを引き出す傾聴、聞き手の理解を重視した言葉のやりとり、共感を呼び、意欲を高める言葉掛けが行われる学校には、いじめや体罰、校内暴力等の問題は発生しにくいと考えます。師弟共に「言葉の力」を高め生かすことで、心豊かに学び合う雰囲気を醸成したいものです。



言葉は、いかなる社会においても文化の基盤を成します。学校には、有形無形に伝承されている、いわゆる学校文化があります。学校文化は、学習指導・生活指導・学校運営や家庭・地域との連携等によって醸し出される学校ごとの特徴であり、それが独自の校風となって学校がかたちづくられています。

多摩地区の各公立小・中学校が、本報告書を参考にしながら、教師と児童・生徒の「言葉の力」を高め生かすことで、より豊かな学校文化を醸成することを期待します。

事例16 P43・44

事例13 P37・38

事例14 P39・40

事例18 P47・48

事例 8 P25・26

事例 7 P23・24